

社会科学における国家概念の可能性——続稿

畠山弘文

はじめに

小稿は、拙稿「比較文明論におけるもう一つの国家概念⁽¹⁾」で紙幅の関係から論じ残した何人かのうち、高谷好一と神島二郎と公文俊平について論じる。主張の骨子は前稿と同じで、近代社会科学における国家の観念が、主に、洋の東西、端的にはヨーロッパと中国という歴史的素材から形成されており、その結果、政治的統治体の性格についての理解が一定方向に誘導される、といえはいいすぎだが、少なくとも学問的には限定されたものになっていることに我々が気づいていないのではないか、ということをさまざまに例証するということである。

まずここまでで確認できたのは、環境考古学者安田喜憲や文明史家入江隆則の考える環太平洋世界においては、国家のあり方に顕著な違いのある三つの文明類型が識別できるかもしれないということだった（前稿ではもう一人比較文明論の外村直彦を扱った。外村は彼のいう「大文明」を二つに類型化する）。これらは、人類の歴史的はじまり以前の世界の環境変動や地球地理的構造を踏まえてなされた（内容だけでなく、その導き方の過程についても）マクロな類型論であり、実証的観察と壮麗な知的冒険の組み合わせが生んだ壮大な仮説である。それゆえ一定の批判が、とくに壮麗な知的冒険部分に、あるいは、端的にそれを可能にした「比較文明論」的発想という、その誕生が（一九世紀生まれの）社会科学とは一線を画する（二〇世紀的）視角そのものに対してというべきか、存在する。

今回扱う高谷は地域研究、神島は政治学、公文は経済学ないし総合的な社会科学の専門家で、いずれも専門性の高い研究を行っていると認められ、同業者の評価は高い。高谷は、すぐ次に触れるように、そのオリジナルな発見をもとに専門家たちが一書を編むほどである。神島も生前は丸山眞男を代表とする「戦後政治学」の主流を生きた研究者（丸山の弟子）であった。なるほど、後にみるように、彼は白鳥たちのなかでは黒鳥だったかもしれないが、やはりもっとも強大な群れの一員だったことは否定できない。公文は、東大の共著者とともに、『文明としてのイエ社会』を著した⁽²⁾。これは、いうまでもなく日本社会論の画期となった共同研究である（他の二人の共著者は著名な政治学者佐藤誠三郎と理論経済学者村上泰亮）。ここでとりあげる公文の議論はイエ社会論後の、近代史を社会科学横断的に俯瞰する独特のもので、志を同じくする人々には大きな関心を呼んだ。

このように高谷、神島、公文はアカデミズムとの関係や受容のされ方という点で、安田、入江、外村たちとは異なった位相にある人々だといえる。アカデミズムの本流にある今回の彼らが、どういう知見を国家や文明との関連で提供するのかをみてみたい。

1 高谷好一の「世界単位論」

(1) 世界単位論の考え方

ここで「世界単位論」というのは、専門家以外にはあまり浸透していない視点かもしれない。地域研究者高谷好一が提唱した考え方である。かつての指導的な東南アジア研究者矢野暢の支持を得て、このテーマをめぐり東南アジア以外の（京大系の）地域研究者らを加えて総合的な研究書も編纂されている⁽³⁾。学問の専門化が進んで、いまでは、他分野には知られてはいないが当該分野で

は誰でも知っているというような議論が少なくない。たとえば「国民国家論」は歴史学の理論で一九九〇年代に活発に議論されたが、政治学者には意外なほど知られていなかった。世界単位論もまた、おそらく、そういうタイプの議論である。

高谷は経歴としては、矢野暢同様、京都大学東南アジア研究センターを拠点に活躍し（矢野はそのセンター長だった）、東南アジアを主たるフィールドに実証研究に励んだが、当然に理論（高谷の言葉では頭）より現地調査（足）を重んじるべき研究者である。地域研究とは基本的にそういうものだからである。しかし同時に、彼は、たとえば、インドネシア国家のような「想像の共同体」（B・アンダーソン）はどうやってうまく機能するものなのかといったような理論的な問い（頭）を常に念頭に置いて思索しており⁽⁴⁾、住民にとってまとまりのある地理的・社会的・文化的・政治的な範囲とはどういうものなのかを理解しようと長年、努力を怠らなかった。その結果たどりついたのが世界単位論である。

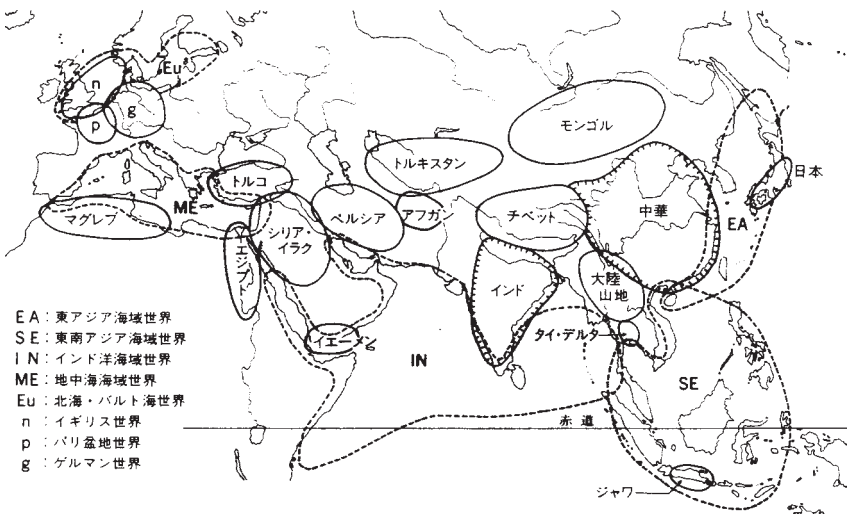
当初、高谷は主に、生態に基礎を置いた共通性に着目して単位を選定・区画することを考えていたようだが、中国のように一つの広大な歴史的事実に対して四つの生態的単位があるような場合をどうするか。また、地理的区分けとしては極小とさえいえるが、その内陸部分とは異質な単位であることが明白な「港」や「オアシス」のようなものをどう腑分けするかを自問していった末に、当初の単純な生態的分類から進んで、今日みるような世界単位論を構想することになった。この世界単位論は港を一個の単位とするような繊細な分類基準をもつことで、比較文明論の創始者アーノルド・トインビーのかかげる（大）文明圏論では取り残されてしまうような弱小な地域をも包含することができる。

さてそうした世界単位は「住民自身にとって意味ある地域単位⁽⁵⁾」としてまず構想され、当初は「そこでは人々が共通の世界観を共有するような地理的範囲⁽⁶⁾」と定義されたが、そうした世界観を探求するのは、実は想像以上に難しい仕事であることが経験を通して高谷にはわかってくる。世界観は、その辺に

落ちていた石ではないからである。それに、難しいだけではなく、時間もかかる。一つの世界単位の確定には言語習得が必要だが、それだけで数年はかかるからである。経緯の詳細は省くが、かくして紆余曲折をへて（たとえば彼の同僚は「ソシオ・カルチュラル・エコ・ダイナミックに形成された、一つの地理的範囲⁽⁷⁾」という定義はどうかとサジェッションし、高谷を感心させている）、世界単位は非常に簡潔に、次のように表現されることになる。

「今では私は『世界単位』とは何かと聞かれると、その精神としては、世界観を共有するところである、答えている。そして、分析的、構造的にいうならば社会文化生態力学的に作り出された一つのまとまりのある地理学的範囲である、と答えることにしている⁽⁸⁾」。

こうした世界単位は、高谷において、暫定的に、世界で二〇以上あるとされる（くり返すように高谷の関心は入江たちのような環太平洋域に限られていない。そしてさらにもっと細かく分類できるとも考えている）。代表的な世界単位だけとして、さしあたり次の図が高谷によって提供された⁽⁹⁾。総計二三の世界単位。



ユーラシアにある代表的な「世界単位」

(2) 世界単位の三類型

その上で、高谷は、これら多数の世界単位をさらに大分類していく。根本的な生態史的共通性に注目すると、そこには三つの大分類が成立するからである。もうご想像のように、この三分類が、まさに前回述べた入江の文明・国家の三類型をただちに想起させるはずである。

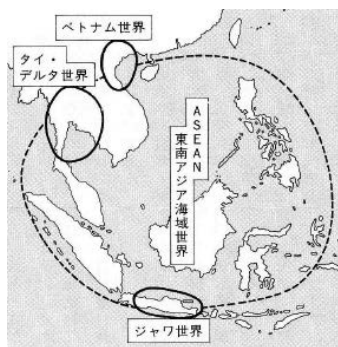
高谷の大分類とはこうである。まず、「生態に基礎をおいた社会」あるいは「生態（適応）型の世界単位」というものがある。そこでは、所与の生態に対応して一定の生業や生活が発展し、そしてそれらに規制されて特有の社会が生まれ、最後に独特の世界観が誕生する。つまり生態の影響が最後まで貫徹しているようなタイプの世界単位が第一の世界単位（群）である。

たとえばインドネシア一国でいえば、ジャワ島（+バリ島）とスマトラ島は異なった生態に属する。ジャワは火山島で長い乾季がある。火山を水源として山麓全体が美しい水稻の棚田で覆われる。そのなかに果樹（マンゴーなど）の屋敷林がいくつもあって、全体として小綺麗で乾いた環境をなしている（これはバリ島も同様である）。いわばこの世の楽園的な場所であり、早くから開発され、既に二〇〇〇年の歴史がある。対して西隣りのスマトラ島は、このジャワ、バリ二島をのぞいた、かつて外島と呼ばれたところの一つで、典型的な熱帯雨林地帯である。スマトラの農業は焼畑であり、跡地で稲を育てる粗放農法である。人々は森の樹木や菌類に圧倒される生活を送るのだという。

こう対比するだけでは二つの島の文明の違いが直感的に理解しがたいかもしれないが、たとえば「モバイル・ベザント」（定着しない農民）という概念があることを高谷は自伝的回顧『地域研究から自分学へ』のなかで触れている⁽¹⁰⁾。十分概念として鍛えられたものではないようだが（そもそも同僚が言いだした言葉のようである）、（稲作）農民といえば定住ないし定着して生涯農業をするというふうには（日本人の）われわれはまったく疑いなく思っている。しかしスマト

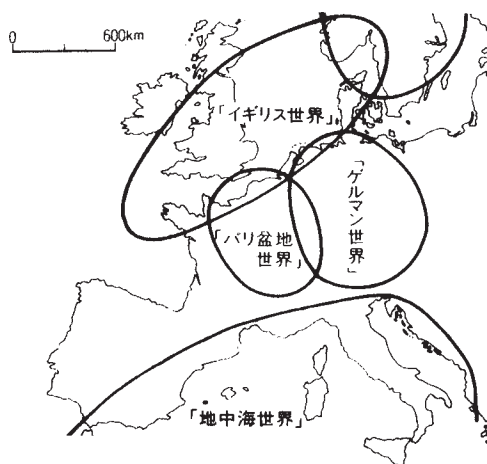
ラやボルネオの農民たちはあるときは船乗り、また行商、あるときは漁民、またワニ捕りにすらなりうる存在だというのである。この文脈で、印象的なのは、スマトラには米づくりは当然あるのだが、水田はないという高谷の発言である。つまり連年米をつくる水田というものは、スマトラなどにはないのである。翌年その農民は行商で田をほったらかしにするかもしれないからである。高谷は当初、タイの農民が稲作に関して日本の農民よりずっと「いい加減⁽¹¹⁾」だとあきれていた。ところがさらにそれに輪をかけて、土地に縛りつけられた者という固定観念では理解しがたい生き方をする農民がスマトラににいるということに驚愕する。しかし、もっと複雑なことに、そういうモバイル・ベザントはジャワにはいないようなのである。ジャワでは普通、米をつくる農民は一生、日本の農民のように、米をつくるからである。彼らは、日本同様、先祖伝来の土地に定着して水田を守るのである。

インドネシアにはこうして、ジャワとそれ以外という二つの世界単位があることになるが、このいずれもが生態型の世界単位である。広く東南アジアを見渡せば、「ベトナム世界」（ただし従来の北ベトナム、中華帝国に朝貢していたベトナムに相当する地域のみと高谷はいう）、また「タイ・デルタ世界」などが、こうした生態に基礎を置いた社会として析出されてくる⁽¹²⁾。



ASEAN・東南アジア海域世界を中心に見た東南アジア

ヨーロッパ中核でいえば、これが三つの生態型の世界単位になる。「パリ盆地世界」(端的にはフランス)、「ゲルマン世界」(ドイツ)、「イギリス世界」(イギリス)。これに、以下に触れる第三の世界単位類型である「地中海世界」が加わると、ヨーロッパには類型は異なるが四つの単位があるということになる⁽¹³⁾ (ただし近代になり国民国家が生まれると様相は異なってくる。すぐ後で触れる岩石学的な表現でいえば、近代になるとヨーロッパは「自形」していく。これは後述)。

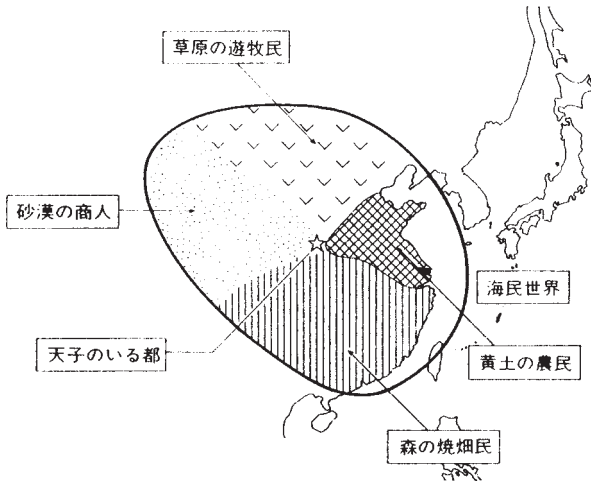


ヨーロッパの中核にある3つの「世界単位」と地中海世界

第二の世界単位は、生態をこえた文明的原理によって一つの単位になるようなところである。これが「コスモロジー型の世界単位」である。これには二つある。一つは「中華世界」、もう一つは「インド世界」である。中国は儒教やその「仁」の考えによって、インドはヒンドゥ教とカースト制によって、多くの生態を含んで、一つの世界単位たりえている、と高谷はいう。しかしご承知のように中国もインドも、ジャワ島とスマトラ島を合わせたより何倍も広い地域である。なのに、それがただ一つの世界単位としてカウントされるところに、

世界単位論の面白さがあるともいえる。

さて中国では中心部の農作地帯（「黄土の農民地帯」）、北の草原地帯（「騎馬民の世界」）、西の砂漠地帯（「商人の世界」）、南の森林地帯（「焼畑民の世界」）があり、大きな地方差がある⁽¹⁴⁾（さらに東の海民区もあるが、次に述べる第三の世界単位類型に属するので除外する）。インドも同様で、ガンジス流域の稲作地帯、インダス流域の砂漠地帯、デカン高原の畑作地帯、南インドの稲作地帯が識別されなくてはならない。しかしこれらがいずれも一つの広大な世界単位として理解されるのである。高谷はこれを「大文明を作った地域」とも呼んでいる。



中華世界の政治生態構造

最後に、第三として、さきほど触れた港のようなものが単位となる場合がある。このような世界単位を高谷はネットワーク型の「交易に生きる地域」と呼ぶ。もしくは「ネットワーク型の世界単位」。たとえば、イラン高原から一〇〇〇メートルも下ったところにあるイランの港町バンダルブッシュフル、あるいはアフリカのケニアの首都ナイロビから四〇〇キロメートル離れた海岸のモ

ンバサなどがその例である。内陸の、イランの場合だと麦作を行うペルシャ人の世界や、ケニアだと牛を追うマサイ族の世界のような、面的な広がりのあるところとは違って、いわば線的に海（たとえばインド洋）のむこうと関係しているのが、これらバンダルブッシュフルやモンバサのような交易都市なのである。同じことは東南アジア、南シナ海、東シナ海の港町でも観察される。次の図はマレー半島についてみたものだが、マレー半島を舞台にしたネットワーク型文明の港がいかに多数あるかがわかる⁽¹⁵⁾。



マラッカ王国を構成した5種類の港

ネットワーク型世界単位は決して港町に限られない。前述したように砂漠のオアシスもまた、同じ性質をもっている。そして草原も砂漠と同様である。高谷は、海の港市と砂漠・草原のオアシス都市と、ネットワーク型の世界単位は二種類あると考える（砂漠と草原は一体となって、一つと分類される）。

以上が大分類された三つの文明型だが、高谷によれば、世界単位相互は絶妙な共生関係にある⁽¹⁶⁾。花崗岩になぞらえて、岩石学の表現を用いて、大文明型

は花崗岩のなかで最初に自由に大きな結晶をつくる長石のような「巨大な自形」、対して生態適応型は後から残された余地に広がる「微小な自形」、そしてネットワーク型は花崗岩において鉱物の間をつなぐ石英のような「他形」と比喻される。

自形、他形という二つの世界単位のあり方をめぐるこのメタファーは、単なる比喻をこえて、高谷の議論では説明の一つの大きな軸でもある。たとえば、さきに少し触れるだけだったが、ヨーロッパの近代については本来、ヨーロッパは生態適応型の文明であったが（したがって微小な自形）、近代になって国民国家をつくりあげることで巨大に「自形化」したと高谷は考える。ここでは王の「帰化」という、彼自身はそのインドネシアへの導入に批判的なベネディクト・アンダーソンの理論装置をそのまま認め（ヨーロッパの概念をそのままアジアにもち込むことに対して高谷は批判的である）、ヨーロッパにおける国民国家形成を、王権下で大きくなった経済圏への王自身の土着化（帰化）として理解している。そうした帰化が複数生じて国民国家の体系（国際関係）が成立している以上（イギリス、フランス、ドイツ等々と）、ヨーロッパが一つの世界単位になることはありえない。このような高谷の観点は、後年のイギリスのEU離脱を評価することになるエマニュエル・トッドの議論とはほぼ同じ内容を、家族構造ではなく、文明型＝世界単位という観点から予想したものといえ、ことのほか興味深い⁽¹⁷⁾。ともあれそうしたヨーロッパの逸脱が近代をつくりあげ、世界支配の道を歩ませたと高谷は考える。この意味で世界単位論は一種の近代批判ないしポストモダン論なのだが、その点は最後に考える。

しかし、近代という逸脱を脇によれば、世界単位はもともと互いに共生関係にあり、その結果、「そこには一つの秩序があり、地球世界は一つの構造を持っている⁽¹⁸⁾」。世界は多数の世界単位からなり、かつ一つのまとまりをなしているというのである。

世界は数多くの自形、他形、その混合などの世界単位からなり（「パッチワー

ク」と表現されるような)、そしてそれら世界単位は以上にみた三つの類型に「結局は」(高谷の言葉)整理された。改めて生態型の世界単位、大文明型ないしコスモロジー型の世界単位、そしてネットワーク型の世界単位。これらが「結局」大区分として機能するのは、要はそれが高谷のいう「大生態」に対応するからである。つまり、大文明型は大きな「野」に、ネットワーク型は「海」、「砂漠・草原地帯」に、そして生態型は強い「森」の地帯に発現した。基本的な生態によって世界単位は規定されるのだと高谷は考えている。ただその同じ類型内で、さまざまな違いも生じており、一方的必然的な規定性があるとみなしているわけではない。

さて議論の本筋に戻り、このようにみえてくると、大生態に対応して三つに大分類された世界単位の考え方は、結果的には、そして内容的にも近い形で、環太平洋文明圏における入江の国家類型、すなわちプラ国家(すなわち高谷の大文明型)、マンガラ国家(同じく生態型)、海洋ネットワーク社会(同ネットワーク型)にほぼ符合するか、これを裏付けるといってよいように思われる。

細かい点では当然違いはある。たとえば文明型に中印がはいり、かつ一つの文明型としての中国は疑われていない。入江の場合では黄河文明と長江文明の決定的な違いという視点が重視されていた。ただ現時点では、中国は一つの大文明型となっていることは確かであり、この点はとくに批判にはあたらないともいえる。世界単位論は、世界大に引き延ばされた入江的三類型と考えて不都合はないわけである。また、安田の動物文明とその相対化としての植物文明という二類型論の視点も、動物文明が大文明型に、植物文明が生態型(とネットワーク型)にほぼ対応する形で受け止めることができるから、安田、入江、高谷の三人が行う世界理解は、各々が類似の方向をむいて並行的な道を歩くものだということもできるだろう。それは、「大文明」に関する外村直彦的な二類型とも齟齬はない(安田に関連していえば、ネットワーク型を動物文明と植物文明を架橋するものと捉えることも可能である)。

学問的にもそしておそらく思想的にも系譜を異にする入江（一般には文芸評論家江藤淳との近さもあり、保守派の論客とされる）や安田（実質的に日本学者梅原猛の影響下にある）などが提唱した文明論的類型が、ある意味アカデミズムのなかで生態学的根拠をもってより学問的に裏付けられた、という個人的印象を筆者は受けるのだが、やはり生態学に偏しているというのが、高谷によれば世界単位論への批判の最たるものだったという⁽¹⁹⁾（とくに川勝平太による批判）。しかし生態学的な分類はその一部にすぎず、最終的に三つの類型に整理するという段階で生態史的な区分（彼のいう大生態）が機能するわけで、生態決定論的な色彩は、くり返すように、濃くはない。大文明型世界単位の提唱はまさにその証拠である。

（3）近代批判としての世界単位論

最後に、約束通り、世界単位とポストモダンとの関係をみておきたい。この点をはっきり意識させるのは、矢野暢である。彼は前に触れた世界単位論集の冒頭の論文「世界単位とはなにか」を書き、最初の節を「ポスト・モダンの思想的課題」と題して議論を始めている。その節の結論部分はこうである。

「『世界単位』論は、いわば、『ポスト・オリエンタリズム』という時代的要請と結びつくべき運命にある。世界を区切る思想の抜本的見直し、自然と人間との共生関係の再確認、権力的思考の反省、文明的視点に代えて、『地方』（ローカル）の視点の導入などを考え方の軸に据えながら、『世界単位』論は、『ポスト・オリエンタリズム』の要請にこたえるために、独自のポスト・モダンの姿勢を打ち出していくべき立場にある⁽²⁰⁾」（なお、ここでポスト・オリエンタリズムが意味するところは、アジア世界とヨーロッパ世界の新たな関連づけ、ヨーロッパ的な視野の狭い近代的思惟様式の脱構築、アジアの主体性の再定義などである）。

この場合すぐに浮上する問題の一つは、国家と世界単位の関係である。これが本稿の問題とも重なるわけだが、世界の抱える諸問題が近代的仕組みの産物

だとすれば、検討されるべきは近代国家と近代資本主義、科学技術の発展、社会進化論的一元論（進歩史観）、「発明主義」（「人間が自らの生存と利害に関係する世界について、恣意的な像化を行う嗜好⁽²¹⁾」のこと）などだと矢野は述べる。そのうち、国家と地域固有の論理としての世界単位の関係はまさに最大の究明課題なのである。

高谷自身はこの点について、こういう面白い見方をしている。彼は「近世」と「近代」を分ける⁽²²⁾。すなわち近世は、ネットワーク型世界単位群が活発に機能した時代だった。その点では近代も同様だが、一つ大きな違いが存在した。それは、近代ではネットワーク型単位群が一人歩きしだし、「本来の他形性をかなぐり捨てて、自形的挙動を取るようになった。……近代とは、いわゆる近代世界システムが世界中を覆うようになった時代である⁽²³⁾」。岩石学的比喩が理論的説明概念として使われているわけだが、要するに、ヨーロッパ近代の問題性をそのようなものと捉える。

対して、アッパース朝に典型的な近世においては、イスラム商人たちの経済は「極めて属人的かつ他形的なものであった⁽²⁴⁾」。伝統中国やその後のモンゴル人たちの帝國的システムの下で、武力を欠いていたイスラム商人は他形的に大活躍した。ところが次に出てきた近代のヨーロッパは、それまで他形的な形しかとったことのないネットワーク型文明でありながら、まったく自形的な展開をした。それを可能にしたのは強力な火器であり、もう一つはイスラムへのコンプレックスであった。ヨーロッパはイスラム文明の北西にあった辺境文明だったからである。「彼等（＝ヨーロッパ）は武力を手に入れると、まるで溜飲を下げるかのように、武力を背景に販売ネットワークを拡大させていった。しかもかつてイスラムが拓いた交易ネットワークに押し入ってそれを行ったのである⁽²⁵⁾」。

資本主義はかくてヨーロッパの拡大した販売ネットワークであり、これを牛耳る中心は徐々にイギリスからアメリカへと変わっていくが、「強制販売のシ

システム」という性質自体には変更はなかった。イギリスについては前に生態型世界単位だという高谷の分類を示したが、それはもともと海という生態に適応したネットワーク型の単位だったと高谷はいう。正確には、内陸で生態適応した牧場地区と海に生態適応した商人地区の合体からなるものであって、「近代になると、火器をえ、国民国家概念を発達させて自形的挙動を展開していくのである⁽²⁶⁾」。

こういう彼の理解を前提にすれば、この収奪システムはもはや交易システムではなく、その意味では近代になって世界単位にもとづく共生のシステムが崩れたということであろう。だからもう一度、生態学的根拠をもつ世界単位に配慮した適切な住民のまとまりの原理（世界観）を実現するような制度なり仕組みなり、あるいは国づくりを考えるべきだということになるはずである。たとえばアセアンなどの広域的地域統合について世界単位の観点から考えることである。また、一つの国家のなかに複数の世界単位を含むことも普通にある。その場合は国家のイデオロギーによって複数の単位が結びついているわけであるが、そのことは「邪悪」なことではないと高谷はいう。ただ意図的に隠蔽せずに現実を受けとめて適切に対応すべきだというわけである。

なお、高谷の論そのものに即して論じてきたが、世界単位論をポストモダン論の高みに持ち上げた矢野自身は、世界単位論に足りない点や批判的論点などにも触れている⁽²⁷⁾。そういう観点から高谷を本稿は論じていない。あくまで世界単位論から何が引き出せるかに着目して、肯定的な側面について論じてきたことを断りたい。

2 神島二郎の「磁場の政治学」

(1) 政治的なまとめの六つの原理

われわれは国家というものを、前稿でも述べたように、明治以前では主に歴代の中華帝国から、明治以後はヨーロッパとアメリカの、とくに帝国主義時代の巨大な国家とそれに関するギリシア以来の政治思想（欧米政治学）を通して学んできた。そのため日本の学問における国家観念の祖型はこの中国と欧米の二つの国家であり、それは安田的な言い方をすれば、ただ一つの国家観念（動物文明における国家のあり方）を反映するものでしかなかったといえる。安田流に考えれば、中国的国家（専制国家）とヨーロッパ的な国家（というのがあるとして。あるとすれば「二重社会」ないし「征服国家」ということになるだろう）はいずれも動物文明の産物であって、大局的にはよく似たタイプの国家観念をもっているはずである。

われわれが営々と学習してきたのは、この広くユーラシア大陸型の国家であった。こう構えると、これに何らかの根本的な違和感を捨てきれなかったのが、伝統的な日本の国家論だったといえるように思われる。模範対象として近づこうとしながらもどこかもどかしい思いも残るとというのが、こうした国家に対するわれわれの（政治学的）感覚だった。日本特殊性論ではないかとの自己不安にさいなまれながらも、日本国家の性格を中国流にも欧米流にも割り切って考えることに苦痛を覚える人々は、しかしながら、もういまとってはあまりいないのかもしれない。政治学ではある時点から（丸山政治学にはじまる行動論政治学の戦後の受容以後）、そうした（人類学的ないし民俗学的？）感覚自体が放棄されるか失われるかして、決定的には一九八〇年代以降の多元主義の導入にみられるように、彼我の国家や社会を、本質的に同じ国家、同じ社会として扱

うという知的枠組を採用する傾向が優勢となってきた。勿論、同じタイプのものにも、自ずとヴァリエーションはある。それが「日本型」云々（たとえば日本型多元主義その他）という名称で差異化されて論じられるほどに、一九八〇年代以降は欧米先進諸国と同質的な国家や社会をわれわれがもっている、とみなすところから（日本政治学の）議論が開始することになる。大嶽秀夫や猪口孝、村松岐夫というビッグネームはその始まりの象徴だった。

ここでは紙幅の関係から、そのような観点と対極をなすと思われる代表的な政治学者として、神島二郎の試みを短く検討する。神島は生存中は啓蒙的・時事的な書物を多数刊行して、戦後政治学の中心勢力の一員だったようにみえた。事実、一周忌には浩瀚な追悼の書が編まれている⁽²⁸⁾。しかしその後は、語られること少ない（普通はそうだともいえるのだが）学者の一人となった⁽²⁹⁾。

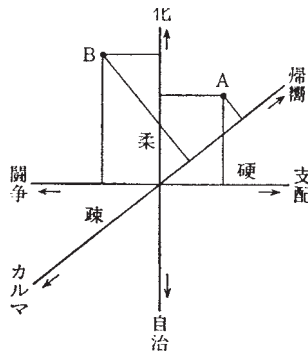
さて神島二郎は自分の試みを「磁場の政治学」と呼んでいる⁽³⁰⁾。磁場の政治学は政治的秩序の、人類学的な視点を踏まえた探求をめざすもので、もし政治が秩序、彼の言葉でいえば「まとまり」をつくりあげる試みだとすれば、それには少なくとも六つの原理があるとする⁽³¹⁾。

この政治的まとまりの六つの原理とは支配（domination）、闘争（conflict）、自治（autonomy）、同化（assimilation）、帰嚮（involution）、カルマ（karma）である。全体は神島自身が表にまとめている⁽³²⁾。表の左に構成要件として七つがあがっているが、これは政治的まとめの原理のいずれにも共通する要件とされる⁽³³⁾。

構成要件 \ 原理	帰嚮	カルマ	同化	自治	支配	闘争
切札	人心	業	文明	自己決定	暴力	真鋭
構造(秩序の)	まつらう・しらす	縁起	内外華夷	連合参加	支配服従	敵・味方
組織	よさし	理勢 (ダルマ)	教化	説得	命令	治
運動	ものあわれ	蟬脱 (ヨーガ)	造反	異議	抵抗	乱
変革	なる	輪廻	文化革命	俱分進化	暴力革命	興亡
価値	清明	平安	豊穰	自足	正義	生命
基底	馴化強制	無化強制	無為強制	無政府強制	異化強制	物化強制

議論の本筋とは直接かかわらないというわけではないが、個々のまとめの原理について詳解していると紙幅をとるだけでなく本稿の主張の密度が弱まる可能性もあるが、やはり最低限、解説しておく必要があるだろう⁽³⁴⁾。

その前にあらかじめいっておくと、これら六原理は、まとめの性質の硬・柔・疎に依じて、神島において、三つの群に分けられる⁽³⁵⁾。秩序達成において、①手あたりまとめ(硬)として、闘争と支配。②手ぬるいまとめ(柔)として、自治と同化。③お手やわらかなまとめ(疎)として、カルマと帰嚮が位置づけられる。おのおのを一つの軸の二つの極として考えるなら、次の図のような立体的なまとめの原理の把握が可能になる⁽³⁶⁾。これを前提に置いてみていこう。



まず闘争原理（神島の省略記号ではC）とは、真鋭を切札とする原理で、真鋭の理解が難しいが、身命を惜みず死を賭することのようである。これは支配原理（力を切札とし詐術を必要とするような兵法などに典型的）とは反対のものである。秩序の構造は敵・味方関係からなる。そこには自ずと治と乱のドラマがある。治とは勝敗の凍結、乱はその融解である。そこで生じるくり返される興亡が政治発展の論理となる。政治発展の論理に求められる価値が生命である。どうも神島の想定するまとめの原理としての闘争原理はかなり段階の低いレベルの社会（狩猟採集社会のような）に妥当するように読める。社会の基底に働くのは物化強制（強迫観念）である。意味するところは、かなりわかりづらい。

支配原理（省略記号D）は暴力の行使を切札とする。秩序の構造は支配服従関係である。命令と抵抗の力学が働き、政治発展の論理は暴力革命とされる。破壊と収奪の現実があるがために、価値は逆に正義となる。神島の想定するこれらの原理が妥当する社会はどうやら騎馬遊牧民の世界のようである。社会の基底に働くのは異化強制（強迫観念）である。少し説明が足りない。

自治原理（同じくAu）とは、自己決定を最後の切札として成立し、秩序の構造は連合参加関係である。説得と異議という矛盾の弁証を通して世論が形成され、これを基軸にまとめが生じる。政治発展の論理は俱分進化というもので、環境アセスメントのように、よき開発が他方では環境破壊をもたらすといったような二元論的把握のこのようである。求められる価値は自足である。山岳・森林地帯の小規模社会がそのまとめの原理が通用する社会とされているようで、社会の基底には無政府強制（強迫観念）が働いている。

さて神島はまとめの性質について、六つの原理を二対の三つに大分類したことはさきほどみたが、さらにもう一つのこれとは異なる大分類を行っている。今度は、日本的なまとめのあり方を抽出するという観点から、六つの原理を二つの群に分けて考えることを提唱する。西洋から政治学を通して我々が学んだものを第一群とすると、第一群はいまみてきた三つの原理、支配、闘争、自治

の原理となる。なかでも支配がキーとなる原理だと神島はいう。

残る三つが日本の政治で優勢な第二群の原理で、同化、帰嚮、カルマである。第二群が、日本政治の歴史的現実にあてはめてみた場合のまとまりの中心的な原理なのである⁽³⁷⁾。だから日本政治を読み解くには、第二群の原理を積極的に包摂する必要がある。

明治以来、われわれは政治原理をもっぱら欧米から学び取ってきたが、そこで学習した原理と技能とは、〈支配〉と〈闘争〉と〈自治〉に関するものであった。しかしながら、政治の原理はたんにこれだけにとどまるものではなく、私見によればこのほかに〈同化〉と〈帰嚮〉と〈カルマ〉の三つがある。……（改行）それにもかかわらず、われわれが従来使ってきた理論的な道具立ては、はなはだしく貧しく、〈支配〉、〈闘争〉、と〈自治〉の三つに片寄り、しかもそのなかで主要な役割を果たしたのは〈支配〉で、云々……。⁽³⁸⁾

紛争の闘争化を前提として一般的に政治状況を考えることが、はたして妥当であろうか。……もし人々の間に一定の〈まとまり〉をもたらしことが政治だと考えるならば、暴力の行使は唯一絶対の前提であるはずがない⁽³⁹⁾。

神島は第一群の根幹に、闘争によるまとめ、苛烈な支配によるその維持、この支配に対する自治による抵抗という、力ないし暴力の仕組みを読みとる。そしてそれが欧米流の政治＝国家観ないし社会の性質にもとづくともっている。「欧米の政治文化の伝統的な質そのものが問われ、それとは異質の系統の民俗文化の政治学的普遍妥当性が再発見されはじめるとき、それは我々の手で総括されなければならないだろう⁽⁴⁰⁾」。神島の政治人類学の主張はこうして生まれるのである。

そこでようやく、日本的なまとめにおいて優勢な、残りの原理についてみていこう。

まず、同化原理 (As) とは、文明の恵沢を切札として成立する。秩序の構造は、内外華夷の弁だという。教化と造反の弁証法がそこには内在する。造反が顕在化すると禪譲か革命が生じることになる。政治発展の論理は文化革命である。求められる価値は豊穡とされる。大陸の大平原で肥沃な土地や資源があり、高度な文明の開花するところ、つまり中国のようなところで成立する原理のようである。事実、朝貢をボトラッチと神島は捉えており、奪うのではなく、豊穡さを与えることによって威信が保持される。社会の基底に働くのは無為強制(強迫観念)だとされる。

カルマ原理 (Ka) はこうである。業(カルマ)を最後の切札として成立する。秩序の構造は縁起であるというが、因果・相互転化・相対補完の関係からなるという。このところがよくわかりにくい、ダルマの理勢とヨーガによる蟬脱のドラマがそこにはある。政治発展の論理は輪廻転生、万物流転だという。求められる価値は悟りの平安、超越の境地である。言葉通り、インドのような熱帯のジャングルや広大なサバンナで、農耕に移行しつつ、狩猟採集への執着があるような社会で成立する原理である。社会の基底で働くのは無化(無イメージ化)強制(強迫観念)である。

最後に帰嚮原理 (Ki) である。これが実は日本政治の基本的な原理だと神島は考えるのだが、帰嚮(ききょう)原理は人々の帰嚮(辞書では心を寄せること。親しみをいやくことといった意味)を切札として成立し、秩序の構造はまつろう・しらす関係である。しらすは傾聴受容、まつろうは自発的協力のこと。あるいは推戴と垂拱の補完関係である。ものあわれという感受性によって関係そのものが維持される。また崩壊もする。ものあわれによって人心の流れが変わるからである。政治発展の論理は「なる」であり、価値は清明(まごころ、無心)である。そして孤島が、となりに高度の文明があるような場合に、この原理が成立するという。まさに日本である。最後に社会の基底には馴化強制(強迫観念)が働いている。

帰嚮原理は日本政治のキーとなる原理なので、もう少し具体的に、その原理が作用するとはどういうことを意味するのかを確認しておきたい。神島はこれと同じ話を少なくとも二度しているが、こういうのである。

「帰嚮原理の根幹は何かといえ、人からものを奪う者、生命を奪ったりできる者がエライとみなすかたちの政治原理（支配原理、闘争原理——引用者）ではなくて、それとはまったく反対のものです⁽⁴¹⁾」。どう反対なのかというと、明治維新によって日本はヨーロッパの近代的国家機構と似たものを作りにあげたという例を神島は引き合いに出す。ヨーロッパの国家機構は、革命によってできあがった国民軍によって支えられた。この軍隊に基礎を与えたのは「国民一人ひとりが武装できるという国民の武装権⁽⁴²⁾」であった。

ところが明治維新で日本がやったことは「国民の一人ひとりをすべて非武装化することであった⁽⁴³⁾」。明治政府は従来武装権をもっていたもの（つまり武士）にも武装権を放棄させ、国家機構に武装権を集中させた。国家機構の担い手（軍人と警官）だけが（職務として）武装するということである。アメリカの場合は憲法で一人ひとりの武装権は保証されていることを「考えてみると、近代のように、もっぱら力の原理でやりはじめた場合でも（日本は——引用者）欧米とはいちじるしく違っていることがわかります⁽⁴⁴⁾」。

ここに明白なのは、力の原理の対極が帰嚮原理だということである。そして帰嚮原理の決め手は人心だった。「全体の人々の心が『ほぼそこにあるな』ということ、それが決め手になるわけです⁽⁴⁵⁾」。

ややしつこいかもしれないが、帰嚮原理という文脈で、この絶対反戦政治学者は次のような歴史的把握を行う。力の政治とは異なる原理の存在がその根拠となる。

おもしろいことは、ムラが解体し、「一億一心」が呼号されたときに、日本は英米に挑戦して大東亜戦争を始めたわけですが、それ以前のムラがまだ崩

壊れない時代においてなされた日本の対外戦争、たとえば日清や日露の戦争はけっして一方的に侵略戦争とはいえないのです。戦後歴史家の多くは、いずれも侵略戦争だったといいがちですが、私などからみると、日清戦争も日露戦争もそうではなくて、日本人にとっては防衛戦争であったと思います⁽⁴⁶⁾。

(2) 二つの社会類型——馴成社会と異成社会

以上、六つの原理について神島のいうところをそのままなぞるようにみてきたが、神島が後続の政治学者たちに敬遠されるとすれば、その理由が奈辺にあるかが少しばかりわかってくるような気がする。もっともまとまったこの本『磁場の政治学』の記述がすでに、難解である。彼の生前中ならまだしも、神島に直接詳細を尋ねることのできないまとなっては彼の説明を十分理解し、これを十二分に使いこなすのは容易ではない⁽⁴⁷⁾。

そうではあるが、こうやってみてくると、神島の有名な二つの社会類型がどういうものなのかの理解はある程度進む。彼は二つの社会を区別する。すなわち「馴成社会」と「異成社会」。この区別はもともと言語の性格（馴成言語と異成言語）をもとにした社会類型で、日本社会を馴成社会に、欧米社会を異成社会に擬している。字面の与える印象と違って、異成社会では人、物、言語などが外から入ってくることに對しては拒否的である。ただし外に出ていくものは追わない。馴成社会では反対に、外から入ってくることは歓迎し、出ていくものを連れ戻そうとする。それは、日本が神島の表現でいう「孤島状況」にあり、入ってきたものが計画的に出ていくことは困難であるため異質なもの同士が「仲良くすることを強制される社会⁽⁴⁸⁾」だからであるという。

異成社会は階級社会で、馴成社会は雑居社会だという整理もある⁽⁴⁹⁾。雑居社会であるということは、階層はあるが人々の違い（異化）が「積分」されずにいるような無階級社会だということである。いうまでもなく異成社会は一種の

征服国家であり、ヨーロッパでいえばギリシア以来の伝統的な国家のあり方である。アテネの奴隷社会からはじまって、「この階級社会というものがずうっと、いろんな形に転換して引き継がれて、基本的には政治的な暴力支配が維持されてきた⁽⁵⁰⁾」。異成社会における異質性とは、支配階級と被支配階級の異質性であって、支配階級内部は同質なのである。異成社会の異質性とはそういうものであるということに注意すべきだと彼はいう。対して馴成社会は雑居社会だから、「いろんな異質なものが隣り合わせにごちゃごちゃ入り混じってしまう⁽⁵¹⁾」。

この二類型の対比を神島は各所で行っており、そのたびに教えられるものがあるが、いまはそれをこう要するだけにとどめよう。それは本稿で神島を扱った理由にもつながっているのだが、「欧米の政治学は異成言語であるところのインド・ヨーロッパ系諸言語を手がかりにして理論モデルを構築してきた。したがって、われわれが輸入・舶来の理論モデルに依存する伝統を克服しようとするなら、異成語のいわば対極にある馴成語であるところの日本語から有力な便宜がえられるであろうし、また、えるべきであると思う⁽⁵²⁾」。

社会の二類型を簡単に整理しておくであろう。

	異成社会	馴成社会
言語	異成語	馴成語
社会	階級社会——奴隷社会	無階級社会——雑居社会
主たる集団	征服国家	共同体
政治の 全体的な特徴	暴力的支配としての政治	「人心のなりゆきを決め手にして 行う政治 ⁽⁵³⁾ 」
優越的な原理	支配原理の優越—— たとえば議会は暴力政治の代替物 ⁽⁵⁴⁾	帰嚮原理の優越

(3) 神島の近代政治学批判

角度をかえて、同じことをみてみよう。神島の磁場の政治学では、丸山眞男の有名な政治学の理論モデルが批判されている。丸山は『政治の世界』（一九五二年）で次のような定式を打ちだす⁽⁵⁵⁾。Cは紛争、Sは解決、Pは権力である。

紛争が生じて解決がある（Ⅰ）。これが状況である。そこに政治権力が介入してことの解決があるのが政治状況である（Ⅱ）。しかし紛争解決のため導入された政治権力が政治状況の展開において自己目的化し、権力の獲得維持増大をめぐる紛争が起こされ、新たな権力の均衡が成立して政治的安定が生まれる（紛争が解決する）というのが（Ⅲ）である⁽⁵⁶⁾。

C—S (Ⅰ)

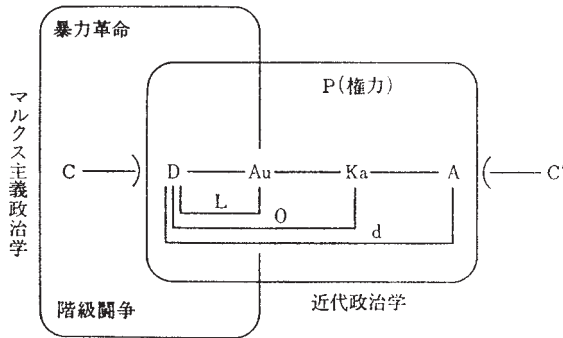
C—P—S (Ⅱ)

P—C—S—P' (Ⅲ) $P' > P$

そして政治権力の再生産過程を定式化したのが（Ⅳ）である⁽⁵⁷⁾。Dは支配従属関係、Lは政治権力の正統化、Oは政治権力の組織化、dは社会的価値の再配分である。支配従属関係の切札は暴力ないし暴力装置の独占とされている。支配従属関係の樹立がこの定式ではもっとも重要とされているから、支配原理を核にして他のもろもろの原理をとり込んでいく定式ということができる、と神島はいう。というのも、L＝正統化は支配原理のもとに自治原理をくり込むということであり、O＝組織化はカルマの原理を支配原理の下にくり込んだものとみなすことができるからである。

C—) D—L—O—d (—S (Ⅳ)

こうして神島は、丸山の定式を神島の諸原理を構造化する一つの方式として組み込む。それが次の定式である⁽⁵⁸⁾。そうすると丸山が提唱する政治学は近代政治学として定式の右部分となり、マルクス主義政治学もまた同時に定式化されて、その左部分となる。

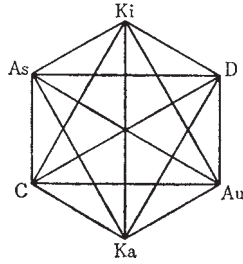


こう図式化して、神島は日本政治に不可欠な原理である帰嚮原理がそこには欠けているという。だから丸山の構想する政治学もマルクス主義政治学も、日本の政治を分析するには適切ではない（丸山はこの定式化をハロルド・ラズウェルに負う、と神島は考えている⁽⁵⁹⁾）。さらには、日本政治以外の政治についてみる場合にも、帰嚮原理をまったく欠くことは不備のそしりをまぬがれない、と神島は主張するのである⁽⁶⁰⁾。

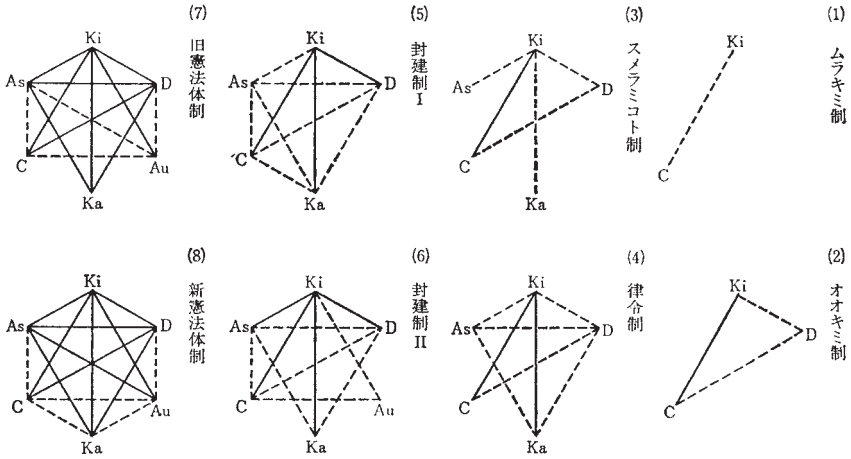
この点は丸山研究者がどう考えているか知りたいところであるが、本稿の課題とは異なる。ただ両者の関係や神島のいまみた丸山批判はおそらくはあまり扱われていないように思える⁽⁶¹⁾。なぜかはわからない。

(4) 神島の政治分析の枠組とその類型

では六つの原理を組み合わせた、現実政治の分析枠組はどうなるのか⁽⁶²⁾。それが次である⁽⁶³⁾（あくまで「六つ」の原理の展開にすぎないと彼は断っている）。



勿論ある地域、ある歴史においてより重要な原理は違う。すべての原理が同じように重要なわけではない。そこで神島は次のような日本の展開過程を図示することになる⁽⁶⁴⁾。



この展開過程はこう読む。まず、孤島（「沖の島」）＝日本の政治は帰嚮（Ki）に始まる。これが闘争（C）をとりこむ。しかし大陸や属島（「地の島」）では多く、Cは支配（D）となりやすく、Dから出発する傾向にある。異民族の征服支配が可能だからである。孤島では異民族支配は一過性で継続的な支配にはならない（なぜだろうか——筆者注）。しかし孤島でも孤島なりの闘争があり、暴力支

配の傾向もある。孤島の生産力に限りがあり人口過剰のおそれがつねにあるからである。この人口を間引く必要ということから同族抗争、仲間の果たし合いが生じる。その際、内が手引きして外の助人を入れるという暴力闘争が生じるという。(1)のムラキミ制は帰嚮原理のなかに闘争原理が潜在する場合であり、(2)のオオキミ制は流入する支配原理を媒介に闘争原理が次第に顕在化して帰嚮原理と従属的に組み合わせられたものとされる。

中国・インドの影響を受けてカルマ原理と同化原理、またこれらと関連して導入される支配原理が組み合わせると、(3)スメラミコト制や(4)律令制が成立する。律令制では形式的には官僚制的編成が進められる。

国内的動乱の結果支配原理が実質化してくると(5)と(6)の封建制ⅠとⅡとなる。封建制Ⅰはモンゴル来襲と中国の影響、封建制Ⅱでは戦国時代、南蛮渡来、鎖国下の儒教文化の影響の重要である。しかしこれらの場合、支配原理はさまざまな制約を受け、帰嚮原理の下で執行代行の政治としてあくまで従属的に位置づけられている点が特徴なのである。

一九世紀の国際状況の下政治制度、思想、理論を欧米から輸入し、理論化の過程を異にする支配原理、闘争原理、また自治原理が組み合わせられてきたのが(7)大日本帝国憲法体制(旧憲法体制)である。はじめて日本で支配原理が政治文化の基軸に据えられ、政治発展の認識枠組となったのがこのときである。ただしこの間、個人レベルでは武装が禁止され、この原理は骨抜きにされたという。

そして敗戦後、支配原理の骨抜きが国家レベルで行われるとともに、マルクス主義的な階級闘争の理論が公認されるのが(8)新憲法体制である。欧米の闘争原理は支配原理や自治原理と結びついてマルクス主義的なプロレタリアート独裁やシュミットのな友敵理論などを生むが、日本の闘争原理はこれとは違い、帰嚮原理と結びついて洗練し、切腹の美学、葉隠の武士道(戦闘者の倫理)、また『闘戦経』の兵学を生むというのである。

これが神島の説明だが、これを一読（筆者には）完全には理解したとはいいたがたいものがあるものの、彼の六原理論的枠組の意図するところだけは了解することができるだろう。

(5) 神島の教訓——なぜ神島は忘却されてきたのか

つまり神島は、言語の対称性、社会のあり方の違い、そこに流れる秩序観の相違などによって政治の仕組みが異なってくる以上は、そうした異なる政治の仕組みを理解するように、新たな学問の体系が構築され、あるいは端的に政治学が更新されなくてはならない、と戦後政治学の草創期に既に考えていた。そういう方向に彼を導いた背景に、柳田民俗学との出会いがあったことはいうまでもない。「丸山眞男の門下生として、彼は丸山のいう『悔恨共同体』の一員⁽⁶⁵⁾」であっただけでなく、神島は既にその前に、柳田国男に親しく学んだ民俗学徒でもあった。加えて彼は下級将校として出征した軍人であり、野戦を指揮し（小隊長）、激戦地ルソン島からかろうじて生還した兵士でもあった。ご承知のように「特攻」が最初に敢行されたのはフィリピンである⁽⁶⁶⁾。

故に（と彼の友人たちは考えているようであるが）、「磁場の政治学」は、日本という「孤島状況」の政治や国家のなかには、暴力的契機以上の要素があると主張する。日本の歴史には、欧米の政治文化とは違った伝統ないし現実があり、これを照射するような政治学が必要なのである。長文だが、その点を口語体で述べた神島の文章を引用しておこう。

先ほど申しましたように、従来の政治というのは武力で支配する、そしてそれが、あまりギラギラと表へ出ない場合でも、背後には必ず武力で支配するということが、根底にあるものというふうと考えられてきたわけです。したがって、政治の決め手は暴力である。政治学研究というものは、ひと皮ひと皮、皮をむいて、最後に残るものは何か、これは暴力であると、こういう

政治学の想定があった。それで、暴力が根底にあるという事実を抜きにした政治は、これは観念的、空想的な甘っちょろい政治であって、暴力が最後に残って、それがものをいうということをきちっと認識するのがリアルな、現実主義的な認識だというふうに、従来しきりに説かれてきたわけです。しかしそれは本当だろうか。今日の世界の事態を前提においてですね、それが本当だといえるのだろうか。少なくとも日本の社会ではそれは本当だとはいえない、過去においていえなかったのではないかというのが、私の考え方であります⁽⁶⁷⁾(太字引用者)。

神島の議論は、少なくとも過去においては、日本に(のみではない)特徴的な政治のまとめ方というのがあって、これを理解するにはそうした特徴に即した政治学を構成すべきというものである。これについてはこれまでも何度も指摘した。

実はその意味では、丸山眞男の「古層論」関係の議論がまた、同じような歴史認識を示したと受けとることもできる⁽⁶⁸⁾。古層論をめぐる議論は丸山門下・周辺には不評だったようだし、その後も他分野の学者から学術的に強く批判された経緯もある⁽⁶⁹⁾。しかし日本の政治に欧米流の政治学が対象とするような国家的現実が希薄である、あるいはそれとは別の原理的現実が「通奏低音」として鳴っているとする丸山の見方は、神島に限らず、これまで(本稿や前稿で)縷々みてきたような文明論的蓄積からすれば、けっして突拍子のないものではない。それどころか、日本の明治以前にはヨーロッパ的な主権国家の観念も国民の観念も正確にはなかったとすれば、明らかにそうしたものを歴史的に生んできた別の世界(ヨーロッパ)で必須の政治的なまとめの原理とは異なるまとめの原理があった、と考えることは当然だともいえる。江戸時代の平和(パックス・トクガワナ)も考え合わせれば、ますますそうした印象は強まる。ポスト中世時代のヨーロッパが経験した圧倒的な戦争経験に対して、日本のように、「近

世」という時代にこれほど社会的・政治的に混乱や戦乱から自由だった政体は、世界史的にも例外だからである。

こうして支配、闘争、そして自治の系統とは異なるまとめの原理があるというふうに進むのはむしろ自然だとしても、あるいは武力にもとづく政治的まとめの原理（支配原理）は決して支配的ではないのではないかと疑ってみることも決して不自然ではないにしても、にもかかわらず、「丸山流」政治学以後の政治学は欧米政治学と通底するものが大きく、そこでは（ウェーバー国家論の継承を含めて）支配原理がもっとも主要な原理としてこれが疑われている気配はない⁽⁷⁰⁾。磁場の政治学は、丸山の弟子や讃美者、研究者、つまり主流の日本政治学の群れによっては忌避された議論なのである⁽⁷¹⁾。

おだやかに省みれば、いま神島がふりかえられることが少ないのは、一つには、彼の難解な一面のある議論が（その意味では丸山も含めて）「日本特殊論」に近づくおそれがあるという懸念、そうした文化主義的傾斜への警戒の念があったといえるかもしれない。多元主義者たちがもっとも嫌ったのはそうした日本の特殊性、文化的特異性を強調する「日本文化論」的な（通俗的と彼らには思われた）議論だった。彼らの判断では、それは前代の「印象主義的」な政治学論議と重なって、学問的専門性、厳密性、実証性を欠くものだった⁽⁷²⁾。

いまその点の詮索はおいておこう。ただ、もしそのような傾きがあったとしたら、それは神島の不幸だったに違いない。神島自身は政治的まとまりのより普遍的な理論モデルを明確につくろうと意欲している。それはこれまでに十分みたといえる。ただそれが、日本の特殊性の指摘に結びつけられて理解されがちだったかもしれないところに、その不幸はあった（そもそも柳田民俗学自体が一国民俗学と揶揄・批判される）。

たとえば「磁場の政治学」では、欧米を「ハードな支配」、日本を「ソフトな支配」と対比するが⁽⁷³⁾（これは社会類型論の延長としてそうなる）、ソフトな支配について①歴史的由来にさかのぼって探求したのが彼の『日本近代化の特質』

であり、②比較政治論的にその原理を抽出し、その原理の組み合わせとして表現しようとしたのが『近代化の精神構造』、『日本人の発想』の系統であった⁽⁷⁴⁾。このような東西的対照、先進ヨーロッパにただ一国日本を対比するような（当時の学問状況としてはある程度納得できるのだが）、わかりやすいがラフな理解の枠組が学者的な反感をかったことは十分ありうる。先進ヨーロッパといってもイギリス、フランス、そして若干の疑問はあるがドイツや北欧もあるし、イタリアを除外していいのかという風に考えていけば、その間の相違は著しく大きい。それが異成社会というだけで共通性を云々されつつ日本一国と対比されるところに、ある意味、不愉快な臭いをかぐ人々がいたとして不思議ではないからである。

神島自身はその点を何度も否定し、かつ同じような内容の反復をいとわず、幅広く啓蒙的な著作活動を行った。ところが、死後その遺志は、ほぼ受け継がれることはなかった。

しかし、ここからはある種の飛躍かもしれないが、こう反問してみたい誘惑にかられる。——もし彼のいうソフトな支配を「孤島状況の社会」日本にのみ、あるいはこれに直接、結びつけるのではなく、もっと広い地域の大きな特徴として提示していれば、どうだったろうかと。そうであるならば、こうも容易に「磁場の政治学」が特殊性論的な地下の安置所におかれることはなかったのではなかろうか。日本をモデルにするというのではなく、ある種の文明の一つの例示として日本を扱っていれば、もっと違った反応があったのかもしれない、ということである（これがまさに本稿のねらいである）。

くり返すように、平和な政治的統合としての馴成社会やソフトな支配、帰嚮原理というのが、動物文明などの四大文明（とその後継中国、西欧文明）とは異なるもう一つの文明論的特徴だという可能性は否定すべくもないのではなかろうか。ならば、もっと広い視野から国家の隠された一面（一群？）を発掘すべき努力は、もっとなされてよいはずではなかろうか。

改めて、国家をめぐる「戦後政治学」の一つの流れ（人類学的視点を加味した歴史的な視点）がかつて存在した。それがわが国で消えて久しい。消えたのは単純に加齢と世代交代であったかもしれないが、一方では新興アメリカ帰朝者政治学者のグループとの覇権闘争に破れたせいだったということもできよう。何といても政治学のグローバルスタンダード（要はアメリカ政治学）に追いつくことがアメリカ帰朝者たち多元主義者の共通の願いだったとすれば、神島の議論は一見するだけだと後退にみえたらうから。かくて、思い出したように丸山眞男の権威が攻撃されたり再構築されたりするのをくり返すことをのぞけば、いまでは日本の国家的伝統を政治学本来の理論的観点から別様に論じるという姿勢は、専門の政治学者にはなくなった。

もう紙幅もないので、結論はこうである。神島からの教訓があるとすれば、日本の国家や政治の歴史的現実を一国史的観点としてではなく、一つの文明論的状况として論じることの意義が浮上してこなければならない。日本を一国として扱うのではなく、もう一つの文明の一つの代表的な例として扱うことで、視界の広がり方は断然変わってくる。

日本＝「文明／国家」。これが重要なのではないかと思われる。改めて、同じ日本を扱いながら孤立した一つの国家（例外としての国家）としてではなく、また伝統的な東アジアの一国としてでもなく（アジアのなかのアジアの国）、ある種の補助線的な（かつての）文明の原理を体現するもう一つのオルタナティブとして論究すること（文明としての日本）。神島の検討を通して得られる示唆としておきたい⁽⁷⁵⁾。

最後に、日本と西欧ではなく、これまで縷々論じてきた二つの文明ということ踏まえて、日欧という冠を相対化して次の文章を読むと、あざやかに神島二郎が復活するような気になる。なるほど国家というより神島の場合は政治のあり方（まとめ）に重心があるが、それは同一の現象の表裏の面とすることができる。だから政治を国家と読み替えて読んでもらえば幸いである。

西欧の政治文化は、暴力支配を政治敵統合の起点とする〈支配〉を成立させ、これが被支配階級の暴力による抵抗と革命とに媒介されて、今日では〈自治〉に転回されるまでになっているが、〈支配〉と〈自治〉とは論理的に違うとみななければならない。これに対して、わが国の政治文化は、帰服推戴を政治的統合の起点とする〈帰嚮〉を成立させ、これに歴史的には暴力による支配を加味しながら、理論的には〈同化〉の論理や〈支配〉の論理を外国から摂取してきたと思われる。

このように考えるならば、わが国においては、文化的には〈育成〉文化、社会的には〈馴化〉強制、政治的には〈帰嚮〉の論理を基本的なモデルとして考察するならば、その現実をかなりよく捉えることができるのではないだろうか⁽⁷⁶⁾。

3 公文俊平の「社会変化のS字波」理論——近代化論第一局面としての国家化

(1) 公文俊平のS字波による局面分析理論

総合的な社会科学の試みがほぼ文明論的境位を得るまでに達した例をとりあげる。公文俊平のS字波による局面分析理論（社会変化のS字波論）は、一口に言えば、近代史の過程について大がかりな歴史的見通しを与えることのできるパースペクティブである。それ自体として貴重であるが、さらにもっと重要なのは彼が国家を基軸にした近代化構想を展開している点である。高谷的な世界の大がかりな分類体系や日本の政治・政治学への神島的な特定集中的な関心などを中和する意味でも、ほどよく「全体的」な（アナル的な持続の時間を扱い、かつそれを何重にも「微分」してゆくことができる）公文の議論を最後にみておきたい。

公文自身はもとよりよく知られた東大教授、経済学者・システム論者であったが、このS字波に定位した理論は、いまいったように、国家を近代化の最初の起点として重視するところが興味深い。というよりそれがくり返すように彼をとり上げた最大の理由である。

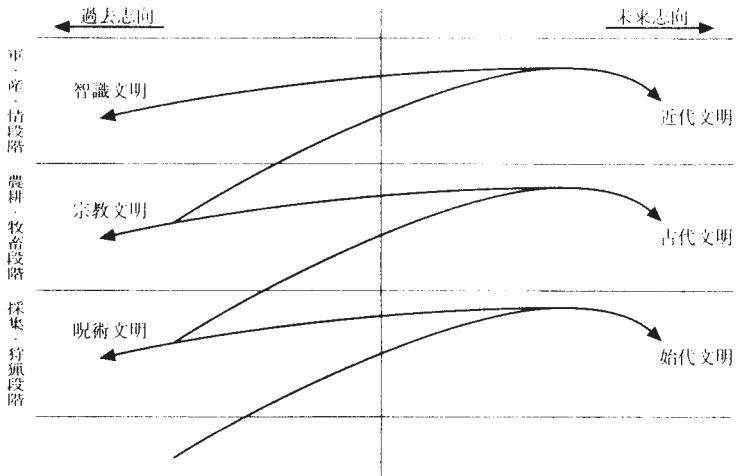
S字波理論（と略称）は、たくさんの本を出した公文にとっては比較的後期の作品となるが、彼の他の主張ほどは人口に膾炙したようにはみえない。とはいえ一定の反響をよんだものであって、幅広い研究活動をしてきた公文の一つの到達点をそこにみることも可能だと思われる。ただし本稿は思想史的な分析ではないので、公文の研究史のなかでS字波理論がもつ意味合いについて議論することはしない。

まず六つの文明について簡単に触れておきたい。公文は、人類はこれまで五つの文明を経験してきたとする。これに来るべきもう一つの文明が加えられると、六つとなる。現文明である近代文明については、人類史の五番目の文明となる。そして現段階は、近代文明の終局に近いところにあるとされる。

1. 「始代文明」——狩猟採集革命に成功した文明。知の段階は呪術以前。人類が一定の技術や言葉を手に入れた段階。
2. 「呪術文明」——呪術革命に成功した文明。行為技術段階は採集狩猟。原始的な信仰が生まれる。現在のアフリカ文明はこの段階。
3. 「古代文明」——農耕牧畜革命に成功する文明。知の段階は呪術。都市や国が生まれ生産力が高まった段階。
4. 「宗教文明」——宗教革命に成功した文明。行為技術段階は農耕牧畜。世界宗教が発展する。
5. 「近代文明」——軍事・産業・情報革命に成功する文明。知の段階は宗教。16世紀ごろからヨーロッパが先導するかたちで始まる。
6. 「智識文明」——智識革命に成功する文明。行為技術段階は軍事・産業・情報。近代文明を超えるもの。

狩猟採集段階の人類はまず始代文明としてはじまる。これが呪術文明になり、農耕牧畜段階に一段上がれば、古代文明が生まれる。そしてそれが世界の大宗教の誕生をへて宗教文明になる。宗教文明も農耕牧畜段階の文明である。さらに近代段階（軍事・産業・情報段階）に達して生まれるのが近代文明であり、それはいまや第六の文明、すなわちポストモダン文明であるところの智識文明へ移行を開始しつつある。

これらは二対の三つの文明に分かれる。次の図がそれである⁽⁷⁷⁾。



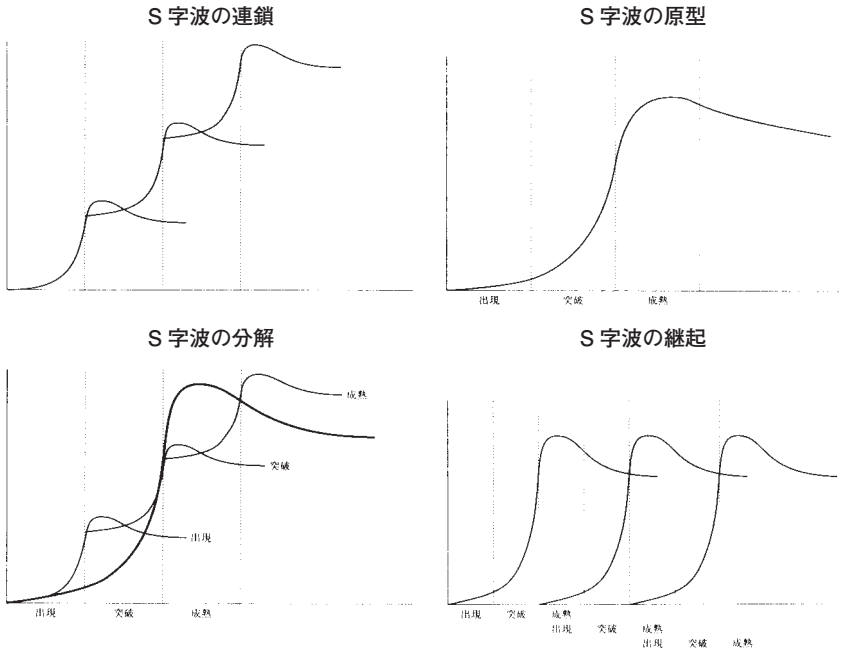
表に直せばこうである。

	未来志向	過去志向
狩猟・採集段階	始代文明	呪術文明
農耕・牧畜段階	古代文明	宗教文明
軍一産一情段階	近代文明	智識文明

さて、こういう大構想のなかで、各文明は、S字波 (Sigmoid) の集合として表現される。つまり文明も一つのS字波として描かれるのである。そもそもS

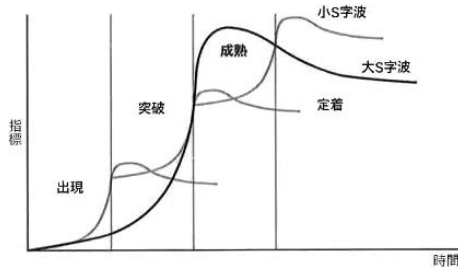
字波理論とは、時間をグラフの横軸に、何でもよいが何かの指標をその縦軸にとると、出現、突破、成熟の三つの連続的な過程（局面）に同じS字波が連鎖的に現れる、という一般的な法則をもとに構想された理論である⁽⁷⁸⁾。

次の四つの図はその複合を示している⁽⁷⁹⁾。

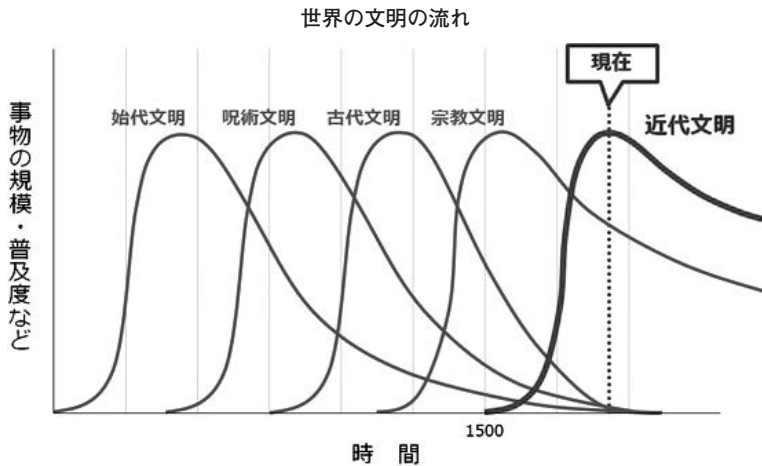


実は三つの局面の前後に、形成（前）、定着／衰退（後）とさらに二つの局面があって、大きなS字波は総計五つの局面からなるから、S字波理論は形成、出現、突破、成熟、定着／衰退の五局面分析となる。

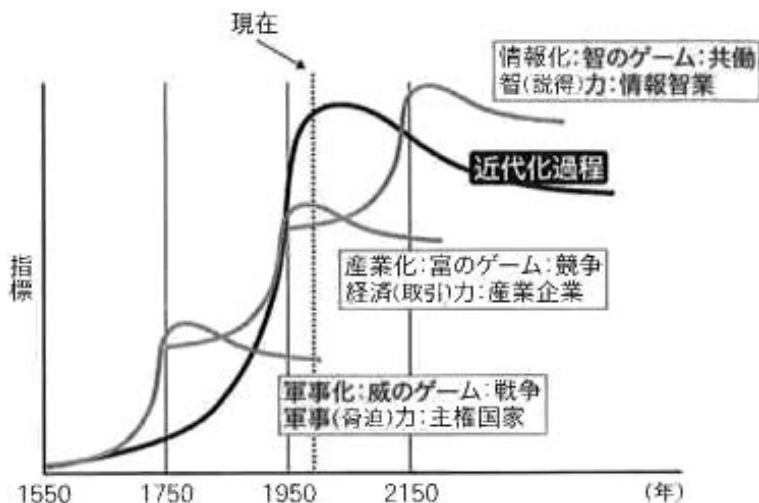
ところで図の四番目（S字波の分解）を解説したのが次の図である。主たるS字波は一段小さいS字波から合成されたものである。そして一段下のS字波はさらに一段下のS字波の合成によって形をなす。こうしてS字波はさらに細分化されてゆく。結局、五段階にS字波は分解されるのである。



こうした五段階ごとに分析が行われる（しかし主に三段階が中心）。これを「深度分析」という。深度0の分析は次の図のように、各文明総体の分析となる。丸ごと一個の文明が全体的に分析されるということである。かくして深度0の分析は文明の長さ分だけの時間を対象とする。つまり数千年単位である。



対して深度1分析はたとえば近代文明を例にとると、次の図のようになる。数百年単位（近代は六〇〇年）が三つの局面に分けて分析される。だから時間的には二〇〇年ほどが局面分析の対象である。



改めていえば、近代化過程の大S字波は三つの波（S字波）から合成されるものとされ、これが全体として近代文明と把握される。前の図の近代文明（S字波）部分を一段深めたS字波の図形がこの図なのである。近代文明の三局面とは、つまり深度1の分析とは、小S字波＝局面としての「国家化の波」（第一局面）、「産業化の波」（第二局面）、「情報化の波」（第三局面）の各二〇〇年を分析対象とするものなのである。

この深度1はさらに深度2の分析によって細分化される。たとえば近代文明の第二局面は産業化の波だが、これを第一次から第三次までの産業革命によって分析する。つまり産業化のS字波＝局面はやはり三つの波＝局面によって構成されており、したがって均等割りすれば各七〇から七五年ほどの三つの産業革命局面を分析することになる。これを近代文明の全三局面について行うことで深度2の分析は完成する。

後は同様で、深度3の分析は二五年程度、深度4は一〇年程度、深度5はさらに細かい時間的幅で三局面が分析されていくということになる。深度3を第

三次産業革命の局面分析でやっていくとコンピュータ産業の分析などがここで
行われ、同じ部分の深度4分析では大型機産業の分析などが行われる。そして
深度5では大型機産業の各局面がマイクロに分析される、という順序になる⁽⁸⁰⁾(な
お各局面の時間的幅は弾力的である)。

(2) 国家化——近代文明の第一局面

1. 深度1分析——国家化の全体像

さてもう細かい理論の説明は十分だろう。そこに重点はない。注意を喚起し
たいと思うのは、公文が近代化を三つの局面の連鎖として理解している点であ
る。それは前に触れたように、軍事化＝国家化、産業化、情報化である。表に
すればこうである。

近代化の三局面	時代	段階の特徴
1. 国家化	1550年～	(近代化の)出現局面
2. 産業化	1750年～	突破局面
3. 情報化	1950年～	成熟局面

そして深度1分析を表にすればこうである⁽⁸¹⁾。

深度1 の分析	国家化（出現）	産業化（突破）	情報化（成熟）
開始時代	1550年以降	1750年以降	1950年以降
前史	封建化（7,8世紀開始）	商業化（12,3世紀開始）	ルネサンス（12,3世紀）, 印刷革命（15世紀）, 科学革命（17世紀）
駆動因（手段）	正規軍化（正規常備軍）	機械化	エージェント化
駆動因（制度的 仕組み）	領分化（領土と領民）	商品化	通識化
核主体	近代主権国家	近代産業企業	近代情報智業
新しい権利	主権（公権）	私有財産権（私権）	情報権
下位主体	臣民→国民	賃労働者→市民	智民
広域的な社会 システム	国際社会	世界市場	地球智場
社会ゲーム	威のゲーム	富のゲーム	智のゲーム
独自の目標	国威発揚/ 平和（安全・安心）	富蓄積/ 繁栄（豊かさ）	智の生産/ 楽しさ（共愉）
別の表現	軍事化	企業化	智業化
別の表現	国際化	世界化	地球化

これをもとに、第一の局面（近代化=近代文明の出現）の詳細をみていこう。
公文の考える「国家化」の特徴とはどのようなものか。

まず国家化の段階にも、その「出現」としての前に、「形成」の前史がある。
形成期は、端的に（従士制と恩貸地制の結合としての）封建制の時代と表現される。
「封建化」がはじまるのは七世紀から八世紀にかけて、場所は公文のいう「宗教文明帝国」（西欧のローマ帝国、日本の律令国家）の周辺であった。そこで領邦的権力体が自立・自律化の試みを行うことで封建制が始動する。

国家化への駆動力をなしたものは「正規軍化」（手段）と「領土化」（制度的仕組み）であるが、これが本格的に立ち上がるのはもっと遅く、一六、七世紀の「軍事革命」によってである。軍事革命を通じて「国家」、「臣民」、「国際社会」（主権国家システム）が「共進化」をとげる。ここでいう国家とその臣民（後の国民=ネーション）とは近代的な主権意識をもち、これを神聖視する統治体と

その構成員のことであり、国際社会とは「主権国家がプレーヤーとなり、一定のルールに従って行われる社会ゲームである『威』のゲームの場⁽⁸²⁾」である。国際社会はまた、人間にとって新しく登場した「地政学的空間」でもあった。

核となる主体（核主体）はあくまで「主権国家」であり、正規軍化とはその主権国家が保有する正規常備軍のことを指し、領土化とはその主権国家間で割譲や分合が可能とみなされるようになった領分（領土と領民）のことを意味する。つまり、強い軍隊と統合された領分を基盤として、至高の主権を神聖視する核主体としての近代主権国家の登場が近代化の第一局面としての国家化なのである。

基本的にこれはヨーロッパの中世末期、近世初期に起こったことだが、それまでの政治的権威である神聖ローマ帝国と宗教的権威である教会とに対抗する原理として主権国家とその国際体制が生まれたということである。「国家主権」という観念は、たいへん大きな思想的・制度的な革新だったといえる。

では主権と何か（主権を保有するのは国家だから、国家主権といっても主権といっても同じことである）。それは、脅迫・強制力、とくに暴力装置（脅迫・強制力の物理的具現としての）を、外部の他主体（とくに同位主体としての他の国家）に対して、また内部の他主体（個人々を含む各種の下位主体）に対して、独占的に保有・行使・委譲する権利である。

主権国家相互の行為の範型は「闘争」であり、その目標は「威」（ないし国威）の増進・発揚であった。さきほど出てきた威のゲームとは、「抽象的で一般的な脅迫・強制力としての国威の増進・発揚ゲーム⁽⁸³⁾」のことなのである。すなわち、威のゲームの直接的な目標は「戦争」（主権国家による軍事力の行使）を通じて、あるいは主権国家の形成に成功していない地域を征服することで、土地や人民を軍事的に獲得することにあるが、威のゲームの究極の目標は、獲得した土地や人民を、「外交」を通じて国際社会に認知させることにある。それがここでいう抽象的・一般的な国威の増進・発揚の意味である。

威のゲームはこうして国際社会を場として「分散・分権的⁽⁸⁴⁾」に行われた。

他方、個々の主権国家内部では、武力の保有・使用を集権的に管理する努力が行われた。いわゆる「平和」とは威のゲームに勝利して国威が国際場裡に増進することであるとともに、国内的な武力や暴力の効果的統制をも意味した。国家の武力（軍事力）が国内に専制的に行使されれば、国内の平和や安全は脅かされるからである。これは国外に対しても同様である。かくして威のゲームに優位を占めるような国々において、主権そのものを国民の下に置こうという思想（主権在民）やその動き、つまり国家の「民主化」が生まれ、成功するようになった。国家の臣民が公民（国民）化していくということである。

国家の民主化は別の形もとる。早く主権国家化した諸国とその下に置かれた地域（植民地や従属国）の軍事力の格差が拡大する一方、国内的には臣民間で高級官僚や軍人などと一般国民との権力格差が拡大する。しかし植民地解放、独立の権利が叫ばれて自らを主権国家として組織する権利が国際的に認められるようになるのと同様、国内的にも権力配分は徐々に平等化していき、こうして民主化がさらに実質化してもいった。だから「やや視点を変えていえば、主権国家の国民にとっての威のゲームの意義は、『闘争』を通じての『平和 (peace)』あるいは『安全・安心 (security)』の達成にあったということもできるだろう⁽⁸⁵⁾」。

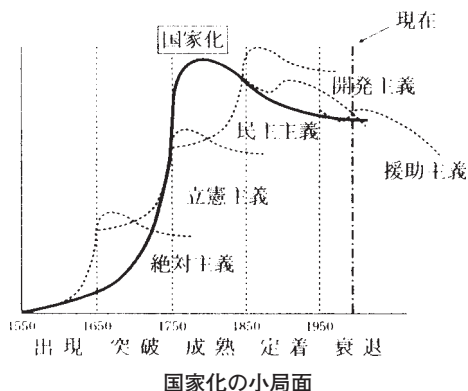
威のゲームの具体的な現れとしての国際法や軍事国際法の誕生と発展、また広域秩序としての勢力均衡理念の主張、国家主権を補完・制約する国民の人権という問題などについても論じられるが、それはここでは省略する。最後に、ただ、国家化は軍事力の集中的増進という意味では「軍事化」、威のゲームが行われる国際社会の成立という意味では「国際化」でもあるということを確認しておくだけにしたい。

2. 深度2分析——絶対主義、立憲主義、民主主義

次にもっと詳細にみていく場合には、国家化のS波がさらにどういう小S波からなるかという、深度2の分析になる。これを少しみておきたい。国家化は

どういう小局面からなるのか。次の表と図がそれである⁽⁸⁶⁾。

国家化の小局面	時代	段階の特徴
1. 絶対王政（絶対主義）	1550～1700年	（国家化の）出現
2. 立憲君主制（立憲主義）	1650～1800年	突破
3. 民主共和制（民主主義）	1750～1900年	成熟
4. 開発主義	1850年～	定着
5. 援助主義	1950年～	衰退



各段階に即して簡単にまとめておく。というか公文の説明自体が箇条書きである。

(1) 絶対主義——出現局面

国家化の第一局面（出現）は絶対主義である。オランダ独立戦争（八十年戦争、一五六八～一六四八年）、三十年戦争（一六一八～一六四八年）、ウエストファリア条約にいたる絶対王政型の主権国家の形成の時代、局面。神聖ローマ帝国やローマ教会の権威から独立する過程。この過程をいちやく理論化するものとしてジャン・ボーダン『国家論』（一五七六年）やホブズ『レヴァイアサン』（一六五一年）。絶対王政は中世的正戦論から脱却して脱正戦論的な領土、植民地、人民の獲得をめざす威のゲームを戦うことになる。

(2) 立憲主義——突破局面

ウェストファリア条約締結を契機とする近代主権国家を要素とする国際社会の成立の局面。国際法が形成され、勢力均衡の理念が成立した。イギリスを先頭に立憲君主制への移行がはじまり、憲法と議会による絶対君主の力の制限が行われる。

(3) 民主主義——成熟局面

近代化の第二局面としての産業化が出現すると重複して、民主共和制への移行局面。国家化の先進諸国ヨーロッパが市民革命を通じてブルジョワ階級の政権参加をみ、民主権論の台頭により国家主権の基礎付けと制限が進み、主権国家は国民国家へと変貌する（公文的には「進化」する）。イギリスがもっとも有力な主権国家として意図的に勢力均衡策を追求し、威のゲームが成熟するなかでボックス・ブリタニカという一〇〇年の平和が達成された。

(4) 開発主義——定着局面

時代的には産業化の第二局面（突破）と重複しつつ、先進国で労働者階級の政権参加と福祉国家化が進行する局面。他方で後発主権国家が台頭して国内的には開発主義、さらには「全体主義的『社会民主主義』⁽⁸⁷⁾」の発展路線を追求する。対外的には先発国（英仏）に対して、あるいは相互間で、世界の再分割を求めて「帝国主義戦争」を引き起こした。すなわち、二度の世界大戦と冷戦のことである。その結果、威のゲームは変質する。すなわち、戦争の目的が他国の政治体制、社会体制や国としての存続自体を変更させようとするものとなり、また戦勝国は戦争を犯罪とみなして敗戦国の占領を行い指導者を裁判にかけようとすることになる。これは他国の民主化を要求したものだが、また威のゲーム（戦争）から富のゲーム（競争）へと国家発展の経路を変えるよう指導することにもなる。威のゲームは敗戦国では正統な国際ゲームであることをやめ、戦勝国（米ソ中国）では核兵器（第二次産業革命がもたらしたもの）の発達もあって冷戦へと突き進む。

(5) 援助主義——衰退局面

産業化の成熟、情報化の出現と重複する局面。主権国家をこえる超国家的なシステムが構築され、最後発地域の近代化に対するグローバルな支援が試みられる。前局面では有力だった社会主義路線は（福祉国家型の社会民主主義も全体主義型の社会民主主義も）困難になる。国連が形成され、植民地主義の清算と独立国家形成への支援が行われる。

他方国連にかわる新しい秩序の模索も始まる。さまざまな紆余曲折をへて最終的に、「地球連邦」や「世界国家」の形成もありうるとするが、今後の予測に多くかかわるので、公文はこの段階のことを結構述べているのだが、あくまで暫定的・未定・未完成というべきである。二一〇〇年まで正確にはわからない。

これが近代化の第一局面、国家化の深度2分析である。国家化の深度3以降の分析は、公文は具体的にやっていない。産業化（近代化第二局面）について深度3、深度4分析が例示的になされているだけである。公文のももとの出自が関係しているだろう。

(3) S字波理論の意義

さてこうみえてくと、比較的、高校世界史授業の常識と合致した、穏当というか反復的な表現になり、「常識的」な整理の枠組という印象を受けられるかもしれない。

しかし、いまこの時点ではっきり目にしているだけに忘れがちな事実がある。国家と国家化をこれほどはっきりと近代化のマクロな世界史の理論のなかに組み入れた議論というのは、実は珍しいというのである。とくに経済学的にはそうだとはいえるだろう。経済学説、なかでもとりわけマルクス主義学説に顕著だが、それらの一般的傾向は、経済発展、端的には資本主義の誕生と発展こそが近代を切り開く、と認識するような議論の組み立てを行うのが通例である。だから、この意味では、産業化こそが第一段階にあるような近代化図式を打ち立てがちなのだといえる。事実、一六世紀をメルクマールとする「原蓄」の展開以降を

資本主義の時代、すなわち近代として描くことが経済学者たるものの原則かのようにある。ウェーバーすら『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』では資本主義の誕生を近代とほぼ同視して、この二つの倫理と精神の同型性(選択的アフィニティ)を論じている。

ことほど左様にこの原則的な理論的観点の支配は強く、その観点からすれば、国家はあくまで資本主義の従属物であり、主体的な、歴史を動かすような力のもとよりないものとして、あくまで二義的・付属的に学問世界では扱われるにすぎない。通常この点に政治学者は反論を提起しないで、避けて通るので、もっとも有力な反対勢力であるべきものの反旗を社会科学は気にする必要はない。だから、それでも国家が近代化をめぐる議論の一テーマとして部分的にも論じられるということがあれば、それは偶然か勇み足というべき事態だったといえるだろう。一口にいえば、それは国家にとってはまれな僥倖だったということである。経済学帝国主義という言葉があるが、国家をめぐる過小評価もその代表的な一例なのである。

にもかかわらず、まさに経済学で訓練を受けた公文がしまいに大きな見取り図を歴史の流れに沿って示そうとするとき、資本主義の誕生と展開から始めず、国家形成を最初にもってき、その後、産業化(要するに産業資本主義革命の成立)と情報化をキーとして局面規定をしていくところが非常に新鮮だといえるべきであろう。公文が最初の問題提起をしてから二〇年近くたって、外国産の国家論的関心が紹介されてきたことで事態は現在ではやや変化したとはいえるが、いぜん公文の国家に対する扱いは数的には例外的な研究といえるべきであろう。

こうして公文の議論はいまでも新鮮ではあるが、歴史の流れを虚心に眺めるとき、資本主義の以前に近代国家としての主権国家がまとまりをみせていたという事実、つまり近代国家は近代資本主義より古いということに自然に気づくはずである。だから国家をそういう歴史のはじめに置くこと自体は、気づいてみれば、そう難しいことではない。なぜ従来は、資本主義の成立過程を中心に

近代の過程を眺めることで圧倒的に満足してきたのか、そちらのほうがむしろ、意外に思えるくらいである。

市場経済としての資本主義はデリケートな機構である。それは何らかの保護器がなければ、簡単にこわれてしまうような仕組みであることは明白である。そうした母親的な保護器ないし保護主体の役割は定義上、市場の外部になくてはならない。社会的信用保証の充実とか共通文化の拘束とかさまざまなのが親心（保護）的に働くとしても、最終的には国家の力によって事実上担保されるときにはじめて、市場はもっとも安定して機能する。そうした国家の見えざる手の役割が二義的に扱われるのが従来の社会科学だった。しかも国家ははっきりと市場の保護に乗り出す以上、国家の手は明らかに「見えていた」はずではないか。見えているのに見えないと思ひ込むという力はどこからきたものだったのだろうか。

ともあれこういう文脈を踏まえると、国家の分析内容自体はある意味教科書的であったとしても、公文のもつ全体的な評価と理論的衝撃は小さいわけではない⁽⁸⁸⁾。

おわりに

本稿は前稿と同様、政治や国家のあり方にかんして、特殊な近代時（つまり近現代という歴史的個性）と近代地（つまり欧米という歴史的個性）によって認識がゆがむということがありうるということを示唆しようということから書かれた。こうした問題提起の理論的な位置づけは、今後もっと大きな形で示すことができるだろうが、従来の政治学による国家論がいくつかの固定観念によって沈滞していることへの注意が喚起できたとすれば、この時点では満足しておきたい。

いずれにしてもユーラシア大陸の征服国家（二重社会）の伝統を引く欧米政

治学のもの見方には欠陥があるかもしれないということは、実は近代理解の従来の視点に重大な問題があることを意味している。政治学をはじめとして社会科学がほとんど、国家はいつか消えゆくもの、そうはならないとしても、せいぜい必要悪である程度の扱いしかしてこなかったため、近代の誕生と展開において国家が決定的な役割を演じた事実がわからなくなってしまったからである。わからないどころか積極的にこれを隠微しようという無意識の抑圧が働いているかのようでもある。

しかし二つの論文でみてきたように、国家の歴史的意義を正当に評価することは現在のグローバル化そのものを考える上でも非常に重要だし、近代の自己認識としての社会科学にとっても同じく大きな前進である。この点が正しく理解されないために、一六世紀以後の近代史もその前の時代の歴史も曖昧にしか理解されないおそれがある。また、二〇世紀の二度の世界大戦の意味も戦後の開発独裁の意義も誤って理解する可能性すらある。さらには二一世紀の後発国の国際戦略を評価していく上でも必須の事項だといえるだろう。

その際、文明、そして文明と対になった国家や政治のあり方という補助線を導入することには大きな意味がある、というように思っただけならば、それで今回は十分としたい。

本稿は思想史的な分析ではなく、あくまで学説史的な整理を行うものである。プラス面を重視し、批判的論点は最小限にとどめたが、ご不満な方は改めて名前のあがった研究者たちについて深く論じていただきたい。

(昔野先生のご関心には添えないかもしれないことを恐れつつ、退職記念号に掲載させていただきます。先生、長い間、折に触れての知性あふれるご教示、ありがとうございます。ありがとうございました。)

注

- (1) 拙稿「比較文明論におけるもう一つの国家概念」『法学研究』明治学院大学、第一〇一号、二〇一六年。なお、同題で続としてもよかったのだが、扱う研究者たちが比較文明論系統ではないため題名を変更した。
- (2) 村上泰亮、公文俊平、佐藤誠三郎『文明としてのイエ社会』中央公論社、一九七九年。
- (3) 矢野暢責任編集『講座・現代の地域研究②世界単位論』弘文堂、一九九四年。
- (4) 高谷はこの大変に有名な想像の共同体論に反論を提起している。ベネディクト・アンダーソンに対する反論というのは東南アジア研究者のなかでは珍しくはない。アンダーソンは想像の共同体論の対象となったインドネシアに対し過度にヨーロッパの国民国家の枠組をあてはめて理解していると、高谷は批判している。高谷好一『多文明世界の構図——超近代の基本的論理を考える』中央公論社、一九九七年、一九一頁以下。
- (5) 同、八頁。
- (6) 同、九頁。
- (7) 同、一〇頁。
- (8) 同、一〇頁。
- (9) 同、一三頁。
- (10) 高谷好一『地域研究から自分学へ』京都大学学術出版会、二〇〇六年、三三頁以下参照。
- (11) 同、三四頁。
- (12) 高谷、前掲『多文明世界の構図』二〇一頁。
- (13) 同、一四九頁。
- (14) 同、三二頁。
- (15) 同、一三五頁。
- (16) 高谷好一『世界単位論』京都大学学術出版会、二〇一〇年、一五二頁。
- (17) 集大成の研究はエマニュエル・トッド、石崎晴己監訳『家族システムの起源Ⅰ』上下、藤原書店、二〇一六年。
- (18) 高谷、前掲『多文明世界の構図』一七三頁。
- (19) 高谷、前掲『地域研究から自分学へ』一〇五頁以下。
- (20) 矢野暢「世界単位とはなにか」矢野暢責任編集、前掲『講座・現代の地域研究②世界単位論』所収、八頁。
- (21) 矢野暢「新しい世界観の条件——「発明主義」の超克を求めて」矢野暢責任編集、前掲『講座・現代の地域研究②世界単位論』所収、二八四頁。
- (22) なおここには「宮崎市定史観」の影響がうかがえるが、論及は差し控える。

- (23) 高谷, 前掲『多文明世界の構図』一八〇頁。
 (24) 同, 一八二頁。
 (25) 同前, 一八三頁。
 (26) 同前, 一八四頁。
 (27) 矢野, 前掲「世界単位とは何か」一九頁以下参照。
 (28) 岡敬三・大森美紀彦編『回想 神島二郎』神島二郎先生追悼書刊行会, 一九九九年。
 (29) 戸邊秀明「神島二郎の一九五〇年代と思想史研究の模索——「民衆思想史」に至る史学史的文脈の再定位」赤澤史朗・北河賢三・黒川みどり編『戦後知識人と民衆観』影書房, 二〇一四年, 二一九頁。この論稿は神島の出世作『近代日本の精神構造』岩波書店, 一九六一年における民衆史論の文脈で神島を論じる。政治学の立場からは田口富久治『戦後日本政治学史』東京大学出版会, 二〇〇一年, 大嶽秀夫『戦後政治と政治学』東京大学出版会, 一九九四年で扱われている程度である。ただし大嶽の検討対象は磁場の政治学に対するものではない。初期の神島の研究が対象である。磁場の政治学そのものを扱った例外的な言及は田口の方にある。「日本の政治学カテゴリー造形の試み」と題されている。ともあれ神島論は丸山や柳田国男などにくらべるべくもない。ちなみに丸山と柳田を比較しているものは結構ある。最新の例として川田稔『柳田国男——知と社会構想の全貌』ちくま新書, 二〇一六年。
 (30) 神島二郎『磁場の政治学——政治を動かすもの』岩波書店, 一九八二年。
 (31) 当初は神島は, 六つの原理以外にもまとめの原理がありうることを示すものとして次の表を提示した。同, 四九頁。

労働	作動	交感	代理	疎外
	採取	カルマ		闘争
	育成	帰嚮	同化	
	制作		自治	支配

ところが, あまり知られていないと思うが, 神島は晩年, 一〇の元理(原理とは区別して使用する)をもつ「元理表」を考案するにいたる。これはその死後, みつかった。元理表とは自然科学の元素表にならった表現なのだが, 六つの「原理」でも難解なところに, 人間の直覚をこえる数の元理についてはさすがに筆者にはいまの段階でこれを詳解することは困難である。表を構成するカテゴリーも二つ増えている。通例通り, 六つの原理に議論を限定した。本稿の二三四頁の表がその元理表である。岡・大森編, 前掲『回想 神島二郎』四三-四四頁。また,

六二頁の指摘も参照。

- (32) 神島, 前掲『磁場の政治学』五〇頁。
- (33) 構成要件について簡単に説明する。切札とは最後の切札として当該原理の核になるもの, 構造は隠れた分類の仕組みとしていつもそこに立ち返ってくるものの秩序の構造, 組織は集合行動を一定の形に規制する組織(オルグ)行為のこと, 運動は人に働きかけて内側から動かしていく運動のあり方をさす。さらに, 変革とは政治変動ないし社会変革の論理を意味し, 価値は求められる基底的价值のこと, 最後に基底とは土台として全体的な枠づけを与えていく社会の基底のことだという。同, 四九-五〇頁。
- (34) 以下の六原理を詳細に検討することは本稿においてはそれほど重要ではない。神島の企図の全体とその意図を理解してもらうことが眼目である。以下はそのため簡単に機械的にまとめたものにすぎない。しかし筆者の世代の政治学徒には神島は読むべき基礎文献だった。そのため当時の記憶にしたがって, まずざっとラフに全体を書き上げ, その後, 個々に文献にあたって, 図なども適宜挿入しつつ, 調整を行うという格好になった。つまり書き上げてから昔の文献を再読した形になる。その結果, 蛇足だが, 感じたことを, 本来こうした注でいうのも何だが, 少しいえば, 日本の戦後政治学第一世代のなかで, 神島のいったことがその後の長い歴史の経過も考えあわせると, 実はもっとも色褪せていないのではないかということだった。あまりに同じ旋律をくり返した(つまり啓蒙的著作や時事的書物が多い)ため逆効果となって, 神島を読むのをやめたしまったことをいまは後悔している。

政治原理表

元理 範疇 category	元理 element	掃蕩 Involution	エロス Eros	カルマ Karma	同化 Assimilation	互換 Reciprocity	自治 Autonomy	法 Rule of law	知己 Menschkenntnis	闘争 Struggle	支配 Hegemony
権力 Power(gambit)	人心 current mood	愛 love	業 karma	文明 civilization	交換 exchange	世論 public opinion	法 law	出会い encounter as chance	真説 mana	武力 armed force	
体制 Regime(order)	まつらう・しらす pietas & regno	法制 relative system	縁 praty-sampada	内外華義 center & periphery	コムニタス communitas	運合参加 consociation	原告・被告 accuser & accused	二人関係 Zweisamkeit	敵味方 friend & enemy	支配従属 domination & subjugation	
制度 Institution	よさし trust	家族なり教養 family-Bildung	道理 dharma	教義 doctrine	伝統 tradition	契約 contract	法治国 Rechts-staat	その名の付く confidence	治 judgment	組織の強制 organization as coercion	
運動 Activity	もののあわれ Japanese boedonn	反抗期 rebellious age	達観 satyagraha	造反 zao fan	革新 innovation	異議 protestation	市民オンブズマン democratic control of public administration	不信 distrust	乱 conflict	抵抗 resistance	
指導 Leadership	受容 capacity(network)	和 Wahlverwandtschaft	行 yoga	超贈与 pottatch	志 ambition	代表 representation	弁論 legal debate	人間洞察 insight into personality	カリスマ charisma	統率 capability (commandership)	
変動 Change	なる becoming	一家離散 broken up family into singles	輪廻 panta rhei	情報革命 information revolution	世直し restoration	二分進化 dualistic evolution	政治の透明化 turn to a transparent politics	祝祭 festival(ortgie)	興亡 rise & fall	暴力革命 violent revolution	
価値 Value	清明 serenite (innocency)	幸福 happiness	平安 sami	豊かさ affluence	共生 mutual (milla)	自由・平等・愛 liberty/equality/fraternity	公正 fairness	信義 faith	いのち life(human right)	正義 justice	
責任 Responsibility	懺悔・自決 confession/suicide	謝罪 apology	請親 resignation	秘物(秘)奉 public service	自戒 self-discipline	相互決定 mutual decision	成敗 judgement	情欲 self-carefulness	人民裁判 people's court	戦争裁判 war tribunal	
財源 Finance	奉納 offer to deity	共食 communion	布施 offerting	貢物 tribute	異人歓待 hospitality	課税 approved taxation	自弁 pay ones own expense	提拱 presentation			
基底 Base	馴化強制 convergent constraint	家族強制 family constraint	無化強制 de-imaging constraint	無為強制 inactive constraint	無辺強制 borderless constraint	通過旅行強制 hijrat(mobility) constraint	情報公開強制 information-disclosure constraint	青春体験強制 youth-experience constraint	物化強制 reificative constraint	異化強制 masyanyaya constraint	

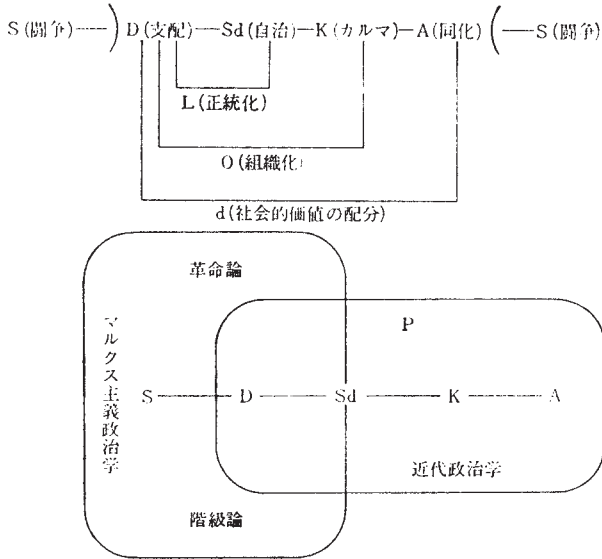
(35) 同、四九頁。

(36) 同、五三頁。

- (37) だからといって日本政治に第一群の諸原理が欠けているとっているわけではない。念のため。いま書いている最中(二〇一六年一月)生じている韓国大統領への一〇〇万人規模の抗議デモは、神島のいう第二群の政治的まとめを求める動きとして捉えることもできるだろう。神島のモデルは、日本対西欧構図における日本特殊性論を求めるものではない。
- (38) 同、二八頁。
- (39) 同、三七頁。
- (40) 同、三九頁。
- (41) 神島二郎『日常性の政治学——身近に自立の拠点を求めて』筑摩書房、一九八二年、二〇頁。
- (42) 同、二〇頁。
- (43) 同、二〇頁。
- (44) 同、二〇頁。
- (45) 同、二一頁。
- (46) 同、一九頁。
- (47) 石田雄「二人の師の間で」岡敬三・大森美紀彦編『回想 神島二郎』とくに一二三―一二四頁参照。
- (48) 神島二郎「日本社会の特性」木村尚三郎他『新・日本人論』講談社、一九八〇年、七四頁。
- (49) 同様に、異成社会の政治は「言語を分化し純粋化して異成語を形成し」、馴成社会の政治は言語を混合し雑種化して馴成語を形成するというのだが、この政治の説明は筆者にはよくわかりかねる。
- (50) 神島、前掲「日本社会の特性」七七頁。
- (51) 同、七七頁。
- (52) 神島、前掲『磁場の政治学』四〇～四一頁。
- (53) 神島、前掲「日本社会の特性」八八頁。
- (54) この点は期せずしてエリアスの議論を彷彿とさせる。ノルベルト・エリアス、中村元保・吉田正勝訳『文明化の理論』(新装版)上下、法政大学出版局、二〇〇四年。
- (55) 丸山眞男(松本礼二編注)『政治の世界』岩波文庫、二〇一四年(原著は一九五二年刊行)。ただし以下の丸山の記述部分は神島の『磁場の政治学』の記述に従って注をつける。なお丸山は生前この本の増刷を許さず絶版になるのだが、その理由を神島は、この本では日本の非武装憲法を基礎づける政治理論を提供できなかったからだとみている。つまり丸山の理論モデル=政治権力論は武力を不可欠なものとしている(神島の政治的まとめの原理では決してそうではない。武力=暴力が切札に

なるのは支配原理のみである)。しかし日本国憲法は自衛以外の戦力＝武力行使を禁じている。その結果、非武装憲法と政治理論との間に齟齬が生じ、それを丸山は乗り越えられなかったと。興味深い指摘というべきであろう。神島の丸山批判が絶版の原因という説もあるからである。神島二郎「柳田国男と丸山眞男を超えて」岡・大森編、前掲『回想 神島二郎』三三頁をとくに参照されたい。

- (56) 神島、前掲『磁場の政治学』五六頁。
- (57) 同、五七頁。
- (58) 同、五九頁。
- (59) 神島二郎「社会党は幻だった」岡・大森編、前掲『回想 神島二郎』二五頁。
- (60) 神島、前掲『磁場の政治学』五九頁。ただし、その後もっとわかりやすい図が示されているので、それも掲載する。神島二郎『政治の世界——政治学者の模索』朝日新聞社、一九七七年、二七八頁。

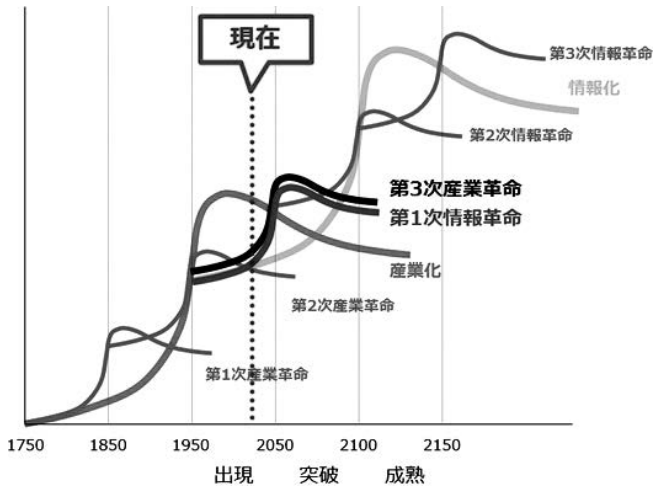


- (61) この点は同僚の丸山研究者渡部純氏に確認した。
- (62) 現実における政治的まとめは、そのうちのどれか一つの原理によるわけではなく、複数の原理の組み合わせによるというのが神島の構想。ただし各原理は個々の地域や文明の政治の特徴的なあり方から神島なりに抽象したものであり、実際にはどれかの原理が特定の政治体では優勢だということができる。その意味で日本は帰嚮原理の優越として把握されているものと思われる。

- (63) 同，六〇頁。
- (64) 同，六〇-六一頁。
- (65) 高島通敏「政治学者・神島二郎氏を悼む」岡・大森編，前掲『回想 神島二郎』六五頁。
- (66) 神島二郎『政治の世界——政治学者の模索』朝日新聞社，一九七七年，序にかえて，など参照。
- (67) 神島，前掲「日本社会の特性」八八頁。
- (68) 丸山眞男「歴史意識の『古層』」同『丸山眞男集第一〇卷一九七二-一九七八』岩波書店，二〇〇三年，所収。丸山「政事の構造——政治意識の執拗低音」『現代思想——総特集丸山眞男生誕一〇〇年』青土社，二〇一四年など参照。
- (69) たとえば末木文美士『日本宗教史』岩波書店，二〇〇六年，とくに「はじめに」参照。これは，丸山的古層論の発想の批判というより，批判が一周してむしろ救い上げようという建設的議論だと思われる。「しかし，では全面的に〈古層〉という発想を否定できるか」というと，それはそれでまた逆の極端に走るようになってしまう」（同，二頁）。
- (70) たとえば最近の国家原理論の一成果である哲学者萱野稔人『国家とはなにか』以文社，二〇〇五年もそうした例だといえる。
- (71) 論壇的な意味ばかりでなく，政治学本体の研究回顧のなかでも扱いが軽い。ここに，民俗学的視点の導入に対する政治学全体の評価というものがうかがえる。たとえば同じ丸山門下石田雄の日本政治学史二冊で神島が言及されるのは本文ではゼロ，注で編著者として一箇所のみである。石田雄『増補新装版・日本の社会科学』東京大学出版会，二〇一三年（初版一九八四年）[二五六頁の注（1）]，同『社会科学再考』東京大学出版会，一九九五年。ただし石田は先に触れた一文，前掲「二人の師の間で」を書いて神島を追悼している（二人の師とはいうまでもなく丸山と柳田）。
- (72) ただし丸山との違いを立教大学の同僚だった高島，前掲「政治学者・神島二郎氏を悼む」は，「理念的な西欧モデルとの対比の上で，日本知識人の認識の歪みをつく丸山氏の方法に対して，西欧を基準として日本を〈裁断〉するという種類の批判が絶えなかったのと対照的に，神島氏は，ムラ共同体を基盤とする日本社会のなかに，西欧社会とは異なる政治的伝統と独自の近代化の可能性が残されていることを，当初から強調されていた」六六頁ときちんと把握している。
- (73) 神島，前掲『磁場の政治学』第四章中の「私の研究」の節，参照。
- (74) アジア経済研究所（神島二郎編）『日本近代化の特質』アジア経済研究所，一九七三年，神島二郎『近代化の精神構造』評論社，一九七四年，神島，前掲『日本人の発想』。
- (75) 結局神島は非武装中立を支持するような主張を磁場の政治学から導こうとする

かにみえるが、現代世界の国際政治の論理（支配の原理）に対して日本的な政治のまとめ方を提起するというのは磁場の政治学における議論と筋が違うと思われる。

- (76) 神島, 前掲『日本人の発想』八四頁。
(77) 公文俊平『文明の進化と情報化——IT革命の世界史的意味』NTT出版, 二〇〇一年, 二〇頁。
(78) 公文俊平『情報社会学序説』NTT出版, 二〇〇四年の「S字波に関する注記」四二～四四頁にその（物理学や生物学における）先駆者たちについての整理がある。
(79) 公文, 前掲『文明の進化と情報化』六〇頁。
(80) **産業化の三局面＋情報化の三局面**



- (81) 公文, 前掲『文明の進化と情報化』五七頁の表を少し変更した。もとの表はこれ。

近代化の三つの波の特徴比較

	第一の波（軍事化）	第二の波（産業化）	第三の波（情報化）
出現の契機	封建化	商業化	人文化
核パワー	軍事力	産業力	情報力
核主体	主権国家	産業企業	情報智業
メンバー	臣民（公民）	従業員（市民）	ボランティア（智民）
基本権	主権（公権）	財産権（私権）	情報権（共権）
活動空間	地政学的空間	工学的空間	サイバースペース（智的空間）
中核的活動	国軍化と領分化	機械化と商品化	ビット化と通識化
活動空間を満たす物	可讓物	人工物	仮工物
広域社会システム	国際社会	世界市場	地球智場
社会ゲーム	威のゲーム	富のゲーム	智のゲーム
ゲームの特性	負・零和	零・正和	正和
ゲームの理念	平和	繁榮	愉快
秩序	政治秩序	経済秩序	社会秩序
秩序特性	集中・集権的	分散・分権的	超分散・分権的
補完権	人権	環境権	身体権

- (82) 同，四五頁。
- (83) 公文，前掲『情報社会学序説』五二頁。
- (84) 公文，前掲『文明の進化と情報化』四六頁。
- (85) 公文，前掲『情報社会学序説』五三頁。
- (86) 同，六一頁。
- (87) 同，六二頁。
- (88) 公文の場合，国家概念はあくまで西欧的なそれであるが，ここでは，国家を歴史（近代）形成の起点に置くという点で従来の社会科学の常識に反するという点を論じたかった。従って高谷や神島とは少し扱い方が異なる（両者は文明の中の国家や政治のあり方を扱う）。しかし国家そのものの「位置づけ」という点で，この三人は，それまでの考え方に抵抗しているといえるだろう。